

平成 30 年度 出雲市文化財調査報告書

いずもおおやしろけいだいいせき
出雲大社境内遺跡 3

2019年3月

出雲市教育委員会

序

出雲大社では、60年ぶりとなる「平成の大遷宮」が2013年（平成25）に執り行われました。その関連事業として、宗教法人出雲大社では「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物保存修理事業」、「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物防災施設事業」などが行われました。

出雲市教育委員会では境内全域が出雲大社境内遺跡にあたるため、掘削を伴う事業に際して埋蔵文化財発掘調査を行ってまいりました。

本書は、2013・2014年度（平成25・26）に行われた出雲大社美術工芸品収蔵庫建設と、収蔵庫の渡り廊下建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果報告書です。本書にまとめた成果が、出雲大社や地域の歴史、文化財保護に対する理解と関心を高めるための一助となれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、格別のご配慮をいただきました宗教法人出雲大社に深く感謝申しあげます。また、多大なるご理解とご協力を賜りました関係者の皆様をはじめ、各方面の方々に対し心からお礼申しあげます。

2019年（平成31）3月

出雲市教育委員会

教育長 槙野信幸

例　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が出雲大社境内遺跡で実施した次の2件の事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書である。

①出雲大社美術工芸品収蔵庫建設事業（平成25年度）

②出雲大社収蔵庫建設に伴う渡り廊下建設事業（平成26年度）

調　査　地　　島根県出雲市大社町杵築東195番地　出雲大社境内

調　査　期　間　　平成25年度　平成25年7月1日～10月31日

　　　　　　　　平成26年度　平成26年7月7日～7月24日

報告書作成　　平成30年度　平成30年4月2日～平成31年3月31日

2. 調査は次の体制で行なった。※（　）は当時の職名と調査年度

調査組織　出雲市文化環境部（平成25・26）、市民文化部（平成30）

事務局　　花谷　浩（学芸調整官　平成25・26）

木村　亨（市民文化部次長兼文化財課長　平成30）

玉木　良夫（文化財課長　平成25・26）

宍道　年弘（文化財課　課長補佐兼埋蔵文化財1係長　平成25・26）

景山　真二（　同　課長補佐兼埋蔵文化財1係長　平成30）

原　俊二（　同　埋蔵文化財2係長　平成30）

調査員　　三原　一将（　同　埋蔵文化財1係主任　平成25・26）

佐々木歩美（　同　埋蔵文化財2係主任　平成26）

石原　聰（　同　埋蔵文化財2係主任　平成30）

調査補助員　糸賀　伸文（　同　臨時職員　平成25・26）

小松原智明（　同　臨時職員　平成25・26）

加藤　章三（　同　臨時職員　平成30）

発掘作業員　大輝正人、金森光雄、周藤俊也、永井瑞枝、原博美、星野篤史

整理作業員　荒木恵理子、飯國陽子、鶴口令子、妹尾順子、中島和恵、吹野初子
前島浩子

調査指導　　角田　徳幸（島根県教育庁文化財課企画幹　平成25）

深田　浩（島根県教育庁文化財課主幹　平成26）

3. 調査及び報告書の作成にあたっては、次の方々及び諸機関から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。

宗教法人出雲大社、文化庁、島根県教育庁文化財課

千家和比古（出雲大社権宮司）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、中村唯史（島根県立三瓶自然館
サヒメル学芸員）、西尾克己（松江市史編集委員）、松尾充晶（島根県古代文化センター専門研究員）、

岡信治（公益財団法人文化財建造物保存技術協会参事・大阪事務所副所長）、松本岩雄（八雲立つ風土記の丘所長）、澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員）、守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター管理課長）

4. 本書の編集・執筆は、景山・原の指導のもと三原と協議のうえ石原が行った。
5. 本書に掲載した写真は、調査員が撮影した。
6. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示す。レベル高は海拔高を示す。
7. 本書を作成するにあたり、『出雲大社社殿等建造物調査報告』（大社町教育委員会 2003 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編）掲載の下記の指図を参考にした。

延享度・文化度 「出雲大社全図」（島根県立図書館蔵、架蔵番号 114、文化 7 年（1810））、部分
「出雲大社全図」の解説・書き下しは、八幡一寛（前出雲市文化財課文献専門研究員）による。

8. 調査にあたって実施した自然科学分析は、AMS 年代測定であり、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。その成果は、第 4 章に掲載した。
9. 本文中で使用した遺構の略号は次のとおりである。

SB：建物 SD：溝 SK：土坑 SP：ピット SX：その他の遺構

遺構番号については、現地調査時の番号を変更した。今回の調査地は「平成 28 年度出雲市文化財調査報告書」（2017 年 3 月）において、瑞垣南側調査区と呼称している。この調査区の遺構番号は、600 番台で整理されていることから、本報告においても、これを踏襲することとしたが、調査地は、収蔵庫・渡り廊下の範囲で限られていることから、分かりやすい数字として、650 番からの番号を当てることとした。

10. 本書においては、中世以降の土師器について中世土師器とするが、近世初頭の土師器も含んでいる。また、中世土師器の分類は、鰐淵寺の分類に依った（出雲市教育委員会 2015 『出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書』出雲市の文化財報告 28）。
11. 本遺跡の出土品は出雲大社、図面・写真類は出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 過去の調査の概要	1
第2章 遺跡の位置と境環	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	7
第1節 調査概要	7
第2節 層序	8
第3節 遺構	11
第4節 遺物	17
第4章 自然科学分析 (AMS 年代測定)	27
第5章 小結	29
第6章 総括	31

写真図版

報告書抄録

挿 図

第1図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所	2
第2図 出雲大社の位置図	4
第3図 出雲大社境内遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第4図 調査箇所位置図 (2013年調査時点)	7
第5図 1区土層断面図	9
第6図 1区・2区土層断面図	10
第7図 1b層上面遺構平面図	12
第8図 1b層上面遺構平面図・断面図	12
第9図 「出雲大社全國(部分)」にみえる仮設建物	13
第10図 II層上面遺構平面図	14
第11図 III層上面遺構平面図	15
第12図 SD651出土遺物実測図	17
第13図 I a・I b層出土遺物実測図	18
第14図 I c・I a~c・II・IIIa層出土遺物実測図・拓影図	19
第15図 III a層出土遺物実測図	20
第16図 III b・III c層出土遺物実測図	21
第17図 調査区平面図(試料採取地点)	27
第18図 历年較正結果	28
第19図 历年較値の分布	28
第20図 出雲大社境内遺跡の基本層序模式図	32
第21図 「平成の大遷宮」に際する調査で確認した遺構	34

挿 表

第1表 過去の主な調査一覧	3	第6表 出土遺物観察表(3)	24
第2表 II層上面遺構一覧表	16	第7表 出土遺物観察表(4)	25
第3表 III層上面遺構一覧表	16	第8表 出土遺物観察表(5)	26
第4表 出土遺物観察表(1)	22	第9表 出土遺物観察表(6)	26
第5表 出土遺物観察表(2)	23	第10表 AMS年代測定結果	28

図 版

図版1

上：収蔵庫調査区（1区） 調査前状況
下：1区 建物跡SB650 完掘状況

図版2

上：1区 建物跡SB0650 完掘状況
下左：1区 溝跡SD651 検出状況
下右：1区 溝跡SD651 完掘状況

図版3

上：1区 II層上面遺構完掘状況
下：1区 III層上面完掘状況

図版4

上：1区 III層上面 炭集中範囲
下：1区 南西壁面

図版5

上：1区 南壁の壁面
下：1区 調査状況

図版6

上：渡り廊下調査区（2区・石畳の部分） 調査前状況
下：2区 1層上面検出状況

図版7

上：2区 溝跡SD651 検出状況
下：2区 溝跡SD651 掘下げ状況

図版8

上：2区 南側の壁面
下：収蔵庫・渡り廊下竣工状況

図版9

出土遺物(1)

図版10

出土遺物(2)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

出雲大社の「平成の大遷宮」は、宗教法人出雲大社が2008年度（平成20）から2018年度（平成30）まで実施した事業である。今回、埋蔵文化財発掘調査を行った「出雲大社収蔵庫建設事業」は、平成の大遷宮にあわせ、「国宝出雲大社本殿ほか22棟保存修理事業」とび「国宝出雲大社本殿ほか22棟建造物防災施設工事事業」などとともに実施された文化財保存修理事業（国庫補助事業）である。

この事業では、平成25・26年度に、宗教法人出雲大社が所有する国宝等の文化財を保管するため収蔵庫建設とこれに付随する渡り廊下の建設が行われた。

これらの建設地が出雲大社境内遺跡であることから、出雲市教育委員会は、文化財保護法に基づき発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

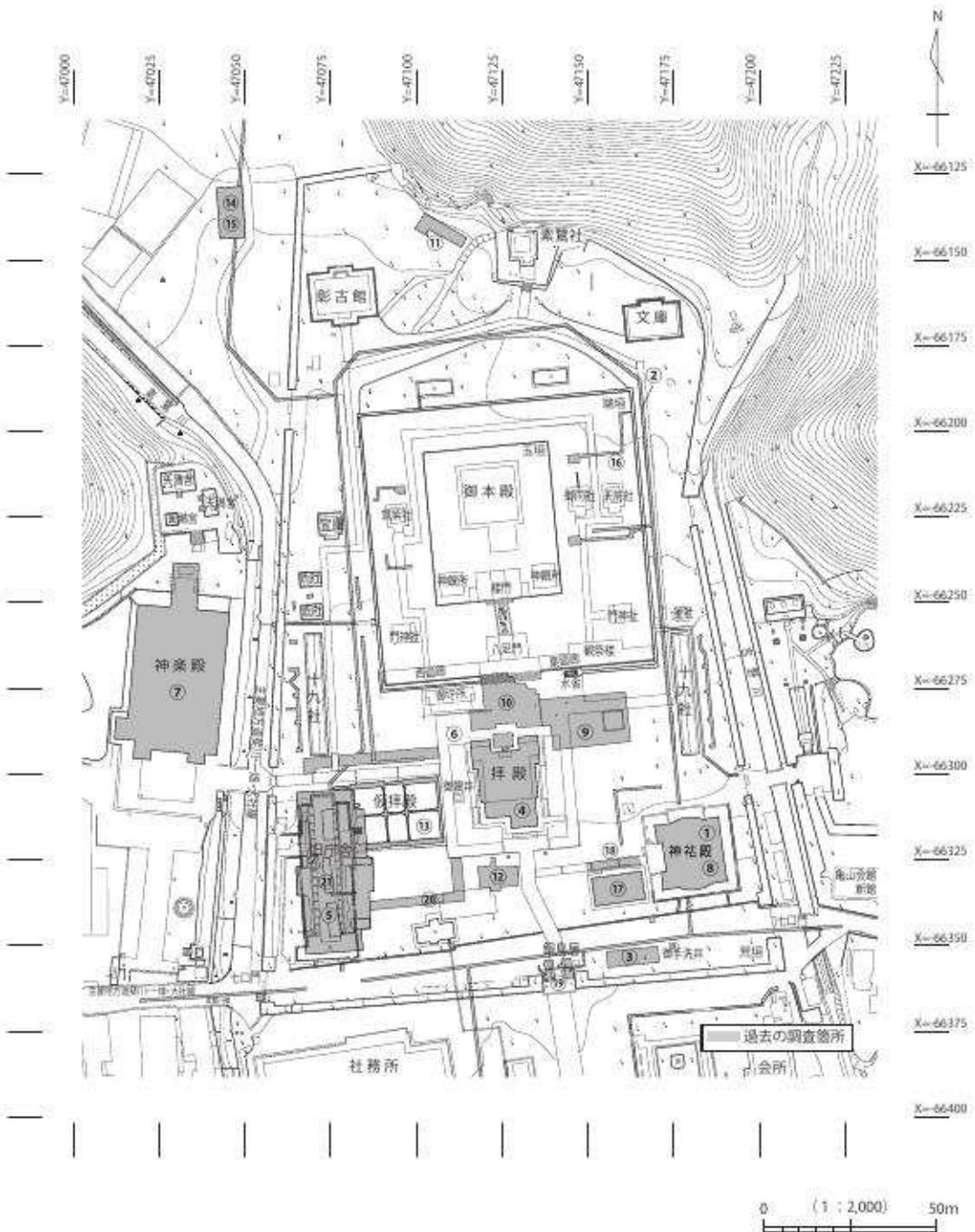
出雲大社収蔵庫建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、2013年（平成25）7月1日から10月31日まで行った。この調査は、出雲大社境内に宗教法人出雲大社が所蔵する国宝秋野鹿蒔絵手箱などの文化財を保管する収蔵庫が建設されるのに先立ち、境内南東部の予定地116m²（東西14.5m、南北8m）について、収蔵庫の基礎に入る現地表から深さ約1mまでを対象に行った。なお、この調査成果については、出雲弥生の森博物館にて、速報展「出雲大社境内遺跡の成り立ち」を2014年（平成26）1月8日から3月10日まで開催し、成果を公開した。

当初の計画では、収蔵庫に付随する渡り廊下部分については、掘削範囲が狭小のため発掘調査は行わず工事立会で対応する予定であったが、文化庁の指導により渡り廊下の設計変更が行われたため、発掘調査を行うこととなった。調査期間は2014（平成26）7月7日から7月24日で、調査面積46.5m²（東西15.5m、南北3m）、調査深度0.7mである。

その後、2018年度（平成30）に発掘調査報告書の作成を行った。

第3節 過去の調査の概要

出雲大社境内遺跡では、これまでに21次にわたり発掘調査が行われている。明治時代の終わり頃には、境内から土器や石器の出土が確認されていたが、考古学的観点から遺跡と認識されるようになったのは、1943年（昭和18）の仮殿建設の際に遺物が収集されたことによる。そして、1953年（昭和28）に拝殿等が火災で焼失したことを契機に実施された本殿防災施設工事の際（昭和29・30年）に、本遺跡最初の発掘調査が行われて以降、事業の実施に伴いその都度発掘調査が行われた（第1図、第1表）。



第1図 出雲大社境内遺跡の過去の調査箇所

第1表 過去の主な調査一覧

調査位置	工事・調査の名称	調査年	概要
①	仮拝殿建設工事	1943年(昭和18)	遺物採取(弥生後期～中世土師器)
②	本殿防災施設工事(鉄管埋設に伴う)	1954年(昭和29)6月	遺物採取(縄文晩期～中世土師器), 烏居基部の大柱根
③	本殿防災施設工事(地下貯水タンク設置)	1955年(昭和30)6月	遺物採取(縄文晩期～中世土師器)
④	新拝殿建設工事	1957年(昭和32)9月～1958年(昭和33)1月	縄文晩期～近世の土器・陶磁器, 中世の掘立柱柱根, 本殿遺構, 天正度・慶長度(近世初期)の基礎建物・溝跡
⑤	庁舎建設	1962年(昭和37)	遺物採取(弥生中期～中世土師器)
⑥	拝殿北地下室増設工事	1968年(昭和43)	遺物採取(縄文晩期～中世土師器)
⑦	神楽殿建設	1979年(昭和54)	遺物採取
⑧	神社殿建設	1980年(昭和55)	遺物採取
⑨	地下祭礼準備室建設	1999年(平成11)9月～2000年(平成12)3月	弥生後期～近世土器・陶磁器, 古墳時代の玉類, 中世の壇列, 宝治度(鎌倉時代)の本殿遺構
⑩	内容確認調査(八足門前)	2000年(平成12)4月～2001年(平成13)11月	平安時代～近世土器, 宝治度(鎌倉時代)の本殿遺構, 慶長度(近世初期)の本殿遺構ほか
⑪	内容確認調査(彰古館北)	2001年(平成13)12月～2002年(平成14)3月	縄文晩期・中世～近世の土器・陶磁器, 中世の遺構面ほか
⑫	内容確認調査(拝殿南)	2002年(平成14)6月～12月	弥生中期～近世の土器・陶磁器, 慶長度(近世初期)の御供所ほか
⑬	仮拝殿建設工事	2007年(平成19)2月	延享度庁舎の雨落溝
⑭	遺跡確認調査(奥谷)	2008年(平成20)11月～2009年(平成21)2月	中世土師器・近世陶磁器
⑮	本殿ほか22棟建造物防災施設工事(奥谷遺跡)	2009年(平成21)6月～9月	中世～近世の土師器・陶磁器
⑯	本殿ほか22棟建造物防災施設工事(境内)	2010年(平成22)6月～2011年(平成23)1月	弥生時代～近世土師器・陶磁器, 中世の瓦敷き遺構ほか
⑰	出土品収蔵庫建設	2013年(平成25)7月～10月	本書報告
⑱	渡り廊下建設	2014年(平成26)7月	本書報告
⑲	銅鳥居修理	2015年(平成27)2月～9月	中世～近世の土師器・陶磁器・錢貨
⑳	環境保全事業・排水対策工事ほか	2013年(平成25)6月～2016年(平成28)2月	石垣・石組水路・陶磁器・錢貨
㉑	庁舎建設	2016年(平成28)10月～2017年(平成29)6月	石組遺構・池跡・祈禱札・一字一石経

関連調査報告書

①～⑫大社町教育委員会 2004『出雲大社境内遺跡』

⑬～⑯公認有形文化財建造物保存協会 2013『全国出雲大社ほか22棟防災施設工事報告書』「第三部 発掘調査」

㉐出雲市教育委員会 2017『平成28年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡』出雲市の文化財報告 35

㉑出雲市教育委員会 2018『平成29年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡2』出雲市の文化財報告 37

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

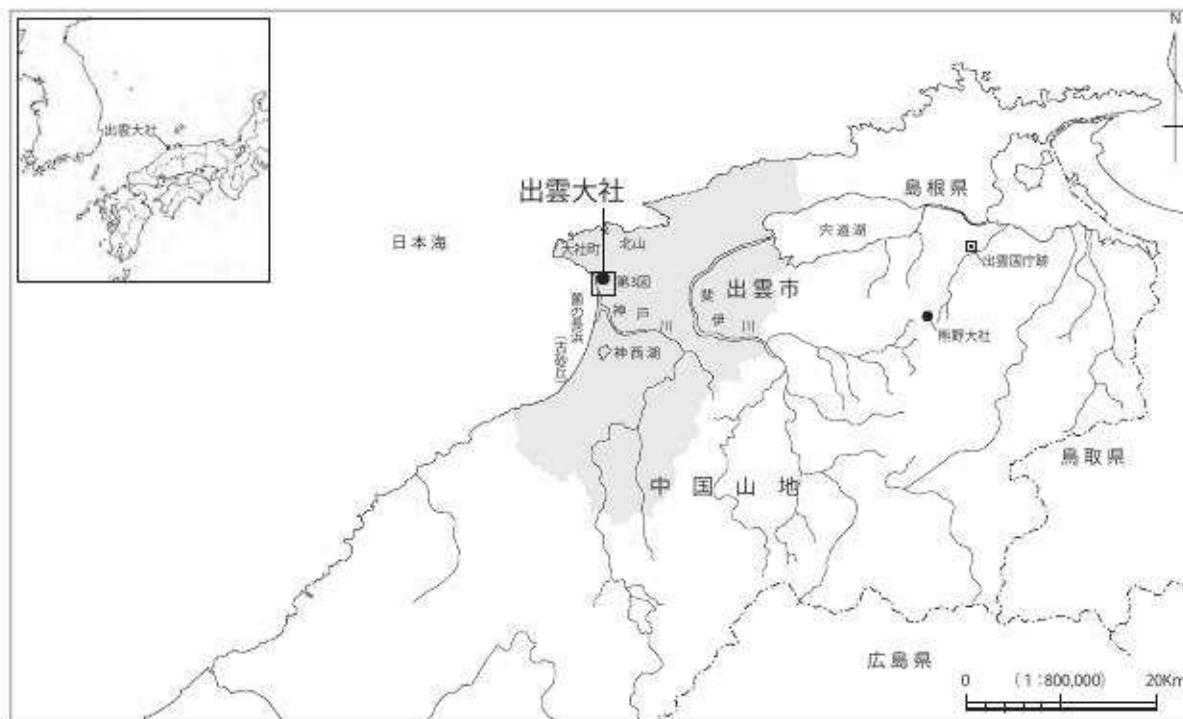
遺跡が所在する出雲市は、島根県東部に位置し、北は島根半島を形成する山塊、南は中国山地がそびえ、東は宍道湖、西は日本海に面している。このうち出雲市街地の北西部にあたる大社町は、島根半島の西端部の山地とその南に接する出雲平野の北西部からなり、平野部の海岸沿いには南北に古砂丘（蔭の長浜）が延びる（第2図）。

出雲大社境内遺跡は、島根半島を形成する北山山麓に鎮座する出雲大社の荒垣で囲まれた境内域が範囲である。北に八雲山、東に亀山、西に鶴山と三方を山に囲まれ、この山々の谷筋から南へ流れる吉野川と素鷦川の間に境内が位置する（第3図）。

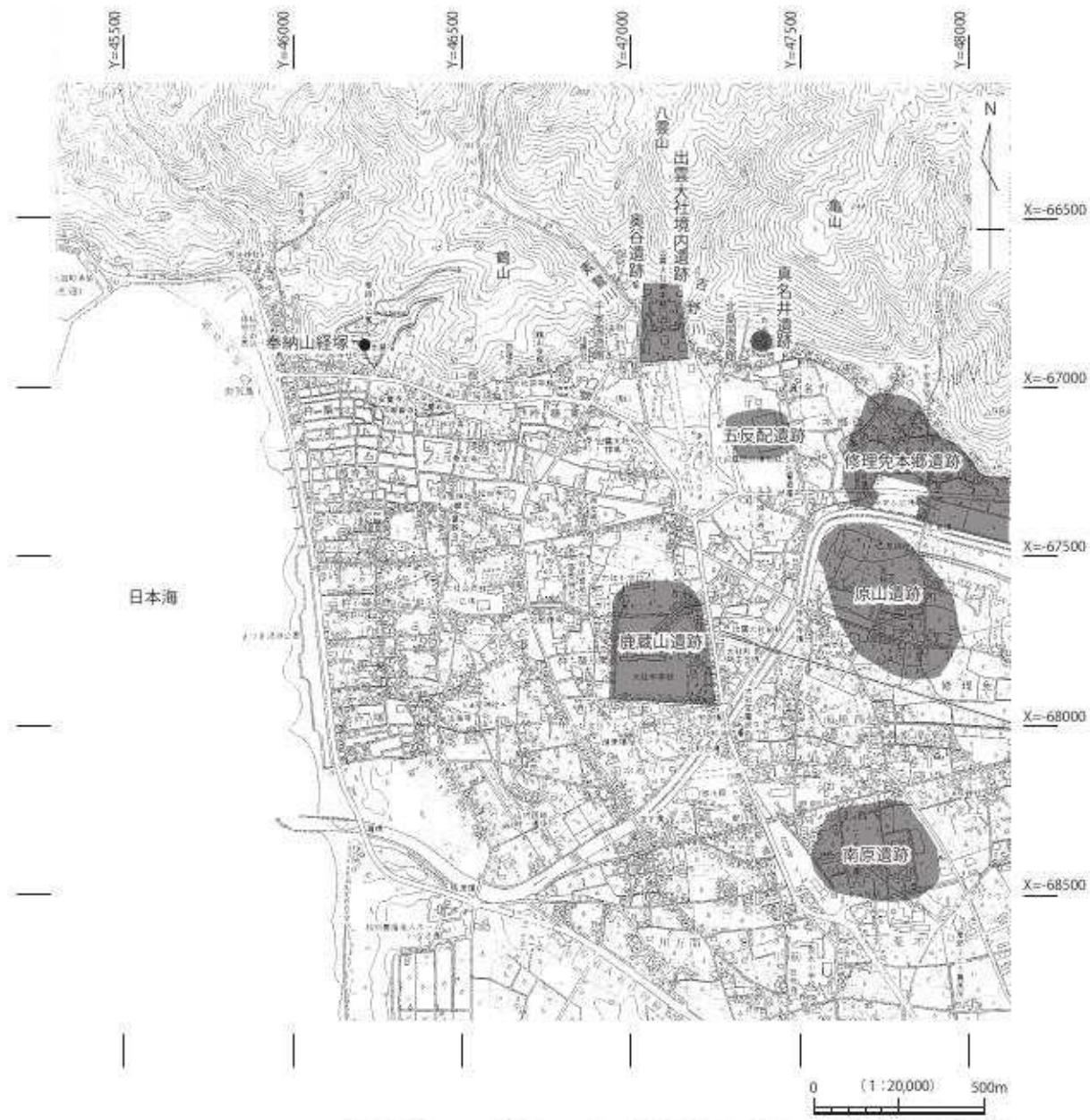
第2節 歴史的環境

出雲大社境内遺跡は、縄文時代晚期から現代まで連続する複合遺跡である。最も古い遺構は、古墳時代前期の溝で、溝内とその周辺から多量の土器と玉類が集中し出土している。遺跡周辺には、弥生時代前期の配石墓が確認された原山遺跡、銅戈と勾玉が見つかった真名井（命主社境内）遺跡、奈良三彩や緑釉陶器、腰帶金具、墨書き土器などが出土した鹿藏山遺跡などが所在する（第3図）。

出雲大社の創建に関しては、『古事記』や『日本書紀』のなかで、巨大神殿の建造について語られるが、具体的な年号がわかる記述としては、『日本書紀』の齊明天皇5年（659）是歲條が創建に関わ



第2図 出雲大社の位置図



第3図 出雲大社境内遺跡の位置と周辺の遺跡

る最初の文献記録とされる。『出雲国風土記』では、その神殿の高大さの由来や用材の採取地について記されている。当時、出雲国造の本拠地は出雲東部の意宇郡にあり、同郡には国庁が置かれ、政治・祭祀の中心となっていたが、平安時代中頃には、国造は拠点を杵築へ移し、杵築大社（出雲大社）が祭祀の中心となる。出雲国造が天皇に奏上した「神賀詞」から、熊野大社と杵築大社が大穴持命（おおくちめいのみこと）を祀っていることがわかるが、国造が杵築へ移った後の平安時代末期には、杵築大社が「國中第一の靈神」と呼ばれるようになるなか、主祭神は素戔鳴尊へと転換する。また、「國中第一の伽藍」と呼ばれた鰐淵寺と強く結びつき、神仏隔離の原則に基く神仏習合が次第に強化されていく。

古代における出雲大社の社殿の造営については、史料が残されておらず明確ではない。11世紀以降については、「杵築大社造営覚書」（佐草家藏、応永19年（1412））、「杵築大社旧記御遷宮次第」（鰐

淵寺文書、近世初め頃)などから造営の変遷をたどることができる。中世の社殿は、十六丈(約48m)であったと伝えられる(「杵築大社旧記御遷宮次第」)。高層建築の根拠となっているのが、文献に残る康平4年(1061)、天仁元年(1108)、保延7年(1141)、承安2年(1172)、嘉禄元年(1225)の社殿転倒の記録である。出雲大社境内遺跡で発見された巨大な3本束ねの柱を持つ社殿は、宝治2年(1248)の正殿式造営のものと推定されている。中世において正殿式造営が行なわれたのは、この宝治度までで、これ以降は仮殿式造営が続き、正殿式造営が再び行われるのは、寛文度の造営遷宮(寛文7年(1667))である。

平安時代後期から鎌倉時代において、杵築大社の造営は、国家が直接指揮、管理していた。室町時代になると、造営主体が大社神官と出雲国守護に替わるが、応仁・文明の乱以後、勧進聖(寺院の僧らで構成)の募金活動などによって造営がなされる。戦国時代には、出雲国を支配した戦国大名尼子氏が杵築大社の造営をも主導し、永正16年(1519)は経久、天文19年(1550)は晴久が造営遷宮を行い、三重塔や鐘楼を建てるなど境内の寺院様式化が図られる。天文度以降は、造営事業に大社本願(寺社の修理・造営にあたる勧進聖)が制度的に関与するようになった。続く天正8年(1580)の造営は、尼子氏を継ぎ出雲国を支配した戦国大名毛利元就の孫輝元、慶長14年(1609)の造営は、豊臣秀頼によって行われた。慶長度造営後の境内の様子が描かれた『紙本著色杵築大社近郷絵図』(北島家蔵)には、朱塗り柱の本殿を中心に、三重塔や鐘楼、大日堂などが描かれ、佛教色が濃くなっている。

境内から佛教色が排除され、神仏分離が行われたのは、次の寛文度造営(1667)である。幕府の財政援助を受けて、松江藩主松平直政が造営を行った。この寛文度造営では、本願を追放し、境内の佛教建築が移築・解体された。また、宝治度遷宮以来の正殿式が採用され、高さ8丈(24m)の本殿が造られ、現在の出雲大社境内の形態が整えられた。主祭神も素戔鳴尊から大国主命に復されている。

その後、延享元年(1744)に造営された本殿が現在の本殿である。以降、文化6年(1809)、明治14年(1881)、昭和28年(1953)、そして、このたびの平成25年(2013)の修造遷宮を経て、今日に至る。

このように出雲大社では、長い年月の間に幾度の造営遷宮が執り行われてきた。出雲大社境内遺跡は、この造営遷宮の痕跡が複雑に重複する遺跡である。

【参考文献】

出雲大社社務所 2001『出雲大社由緒略記』

出雲弥生の森博物館編 2013『2013年特別展 もう一つの出雲神話—中世の鰐淵寺と出雲大社—』

大社町教育委員会 2004『出雲大社境内遺跡』

大社町史編集委員会編 1991『大社町史 上巻』大社町

大社町史編集委員会編 2002『大社町史 史料編(民俗・考古資料)』大社町

島根県古代文化センター編 2002『島根県の歴史を語る古文書 出雲大社文書—中世杵築大社の造営・祭祀・所領—』

奈良文化財研究所 2003『出雲大社社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会

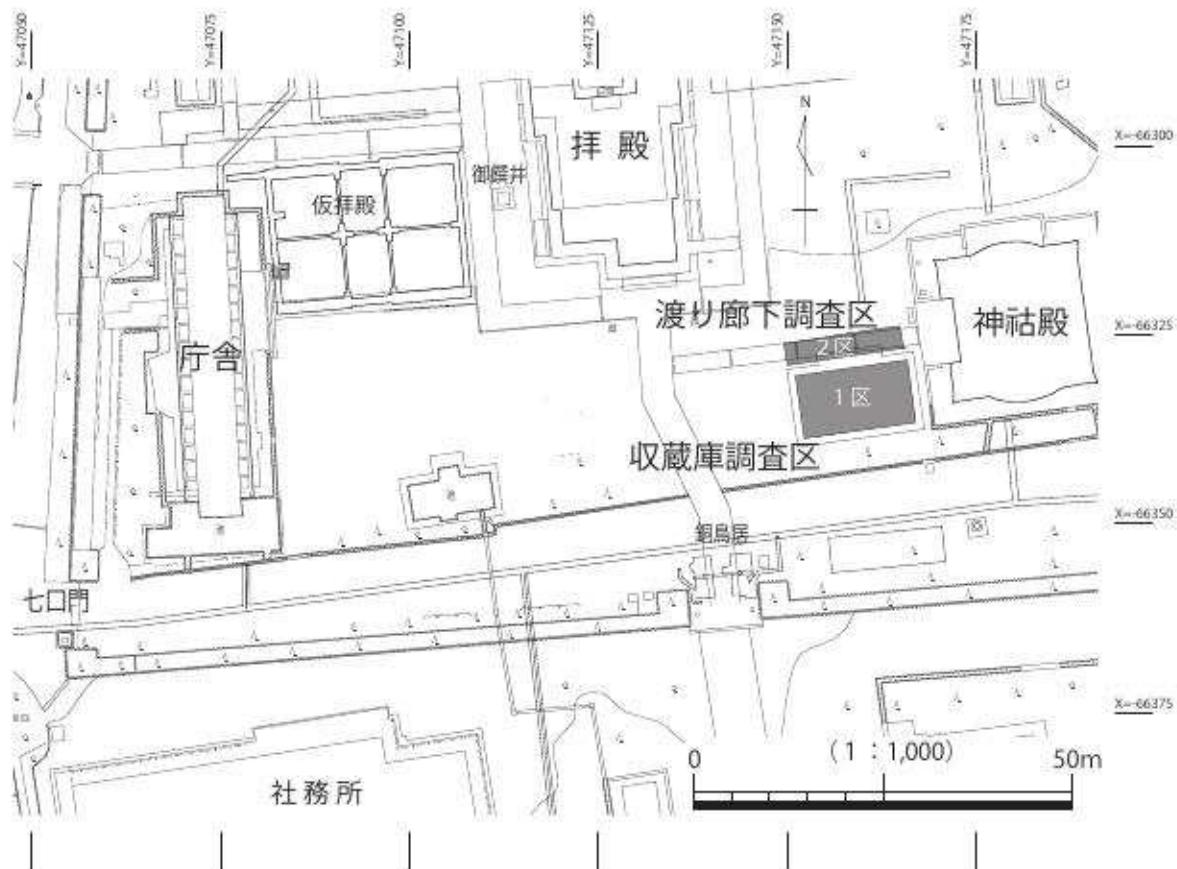
第3章 調査の成果

第1節 調査概要

平成25年度に実施した収蔵庫部分（1区）の調査では、面積116m²（東西14.5m、南北8m）を発掘調査し、建物跡1棟（SB650）、溝状遺構1条（SD651）、ピット、土坑が見つかった。また、翌26年、追加で行った渡り廊下部分（2区）の調査では、面積46.5m²（東西15.5m、南北3m）を発掘調査し、溝状遺構（SD651）の北延長部分とピット、土坑が見つかった。

調査にあたっては、出雲大社境内であることから、他所に残土置き場を確保することができなかつたため、調査範囲を東西に分け半面ずつ調査し、一方を残土置き場とした。

収蔵庫予定地とされた境内南東部は、「出雲大社全図」（文化7年（1810）、島根県立図書館蔵）では、仮設建物が朱書きされた位置にあたる。また、出雲大社では過去約21次にわたり、発掘調査が行われているが、調査例の少ない境内南東部を面的に調査できた点においても重要である。



第4図 調査箇所位置図（2013年調査時点）

第2節 層序

今回の発掘調査による掘削は、1m以下は建物基礎が及ばないため地表より1mで掘り止めている。調査で確認した層は、大きく3つの層に分けることができる。

収蔵庫予定地は、地表面を覆う5～10cmほどの玉砂利（I a層）の下に、寛文度かそれ以降の造成土である層（I b・I c層）が40～50cm堆積する。この層は、黄褐色系土の層で、10cm前後の礫を含み、固く締まり、中世土師器、近世陶磁器が出土した。この層は、境内全域で確認できる層ではあるものの、本調査地は、文化度造営時に仮設建物が設置されており、掘削、整地などが繰り替えされていると考えられる。

I c層下には、厚さ10～40cmの褐色系の海砂または砂丘の砂の二次堆積層（II層）が堆積する。粒がそろった石英砂を主とし、ラミナ状堆積が確認できる（注1）。この層は調査地全面で確認した。

本調査での最下層は、中世の土師器片を多量に含む洪水による堆積層（III層）である。吉野川の氾濫に伴う洪水の層と考えられ、人頭大の石を含む。上面は、固く締まり、一部土壌化していることから、かつての地表面と考えられる。調査区南西隅では、II c層とIII層の間で、10cm前後の炭化物が認められた。火災などの原因が考えられるが、詳細は不明である。炭化物のAMS年代測定により、1488年から1640年という年代が得られている。

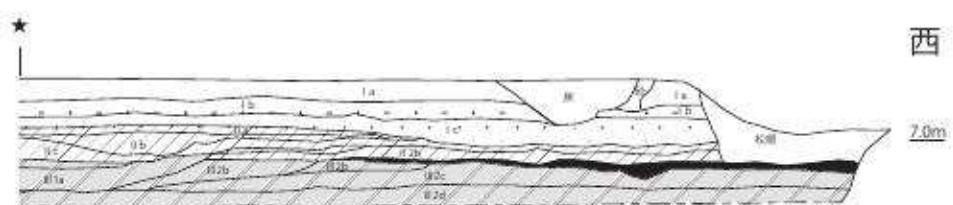
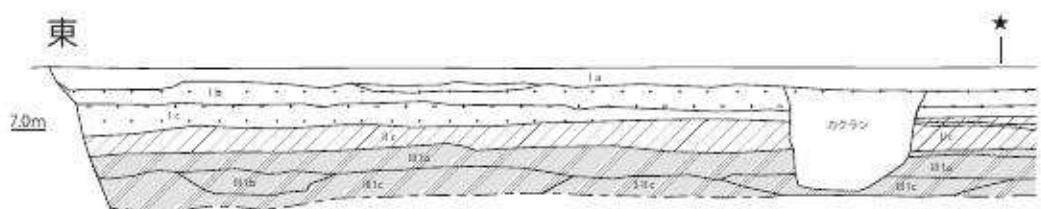
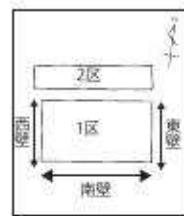
調査区は、1区・2区と分かれているが、層位的には同一の認識で調査しており、遺構・遺物について合わせて報告する。

（注1）調査区の堆積状況については、島根県立三瓶自然館サヒメルの中村唯史氏にご指導いただいた。

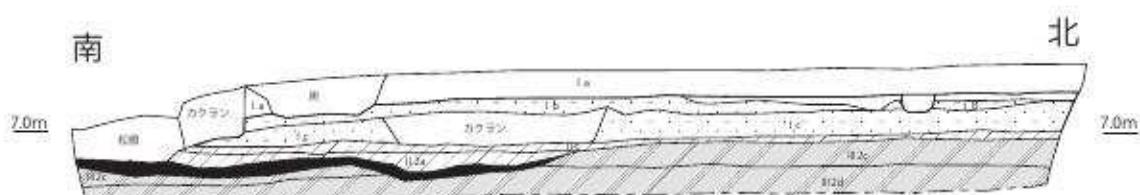


調査風景（西から）

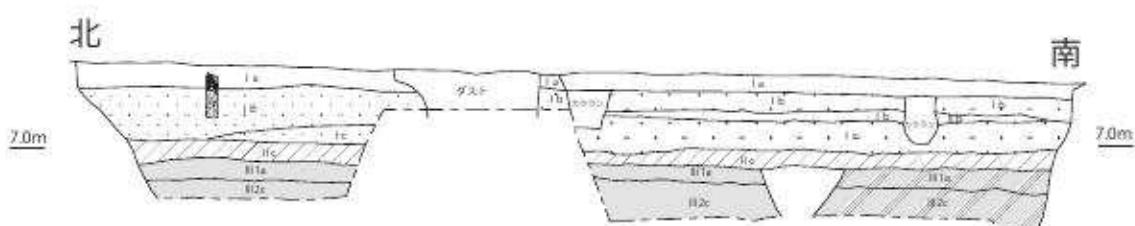
1区土層図



南壁土層図



西壁土層図



東壁土層図

I b + I c 層：造成土（江戸時代以降）

II 層：海砂又は砂丘（江戸時代初め填か）

III 層：土石流による堆積（中世）

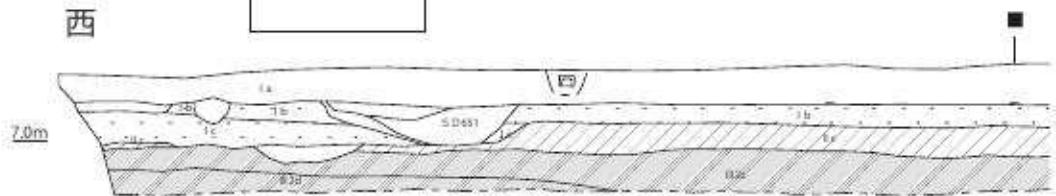
■ 炭化物

0 (1 : 60) 2m

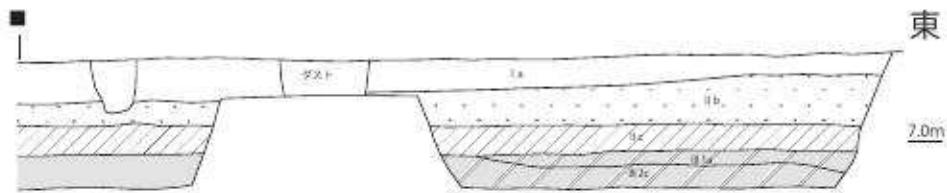
第5図 1区土層断面図

1区土層図

西



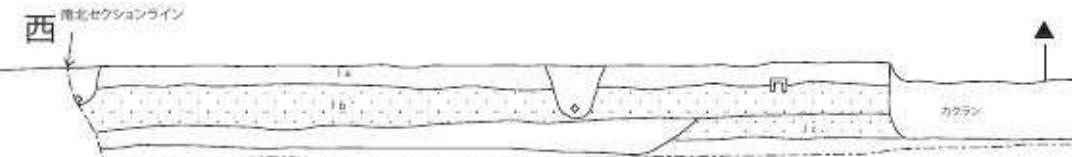
東



北壁土層図

2区土層図

南北セクションライン



東



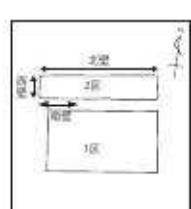
北壁土層図

南

北

東

西



南北土層図

南壁土層図(SD651付近のみ)



Ib・Ic層：造成土（江戸時代以降）



II層：海砂又は砂丘（江戸時代初め頃か）



III層：土石流による堆積（中世）

0 (1:60) 2m

第6図 1区・2区土層断面図

第3節 遺構

1 近世以降の遺構

建物 SB650（第7図 図版1下） 調査区西側において見つかった石列である。表土（玉砂利）を鏟取り、1b層上面で確認している。石が取り外されている部分もあるが、南北10.5m、東西4.0mを測る。建物の地覆石で、東面～南東角部分である。

石列で囲まれた建物は、『出雲大社全図』文化7年（1810）にある仮設建物と考えられる。

仮設建物は、5間半×1間半の建物で、屋根は藁葺き、庇のある建物であったことが『出雲大社全図』からうかがえる（第9図）。

溝 SD651（第7・8図 図版2） 建物SB650の東側で確認した。確認面は、1b層上面である。南北方向に延び、2区では北端部が折れて西へ延びるのを確認できた。1区の南端部も西へ折れる様子が見られる。長さ約11m、深さ約0.1mで、建物跡SB650を囲む雨落溝と考えられる。

その他遺構 SK652（第8図） 現地表面では、松の木が植えられていた地点である。1b層上面から円形のプランが見えており、松の木を植樹した際の土坑である可能性が高い。

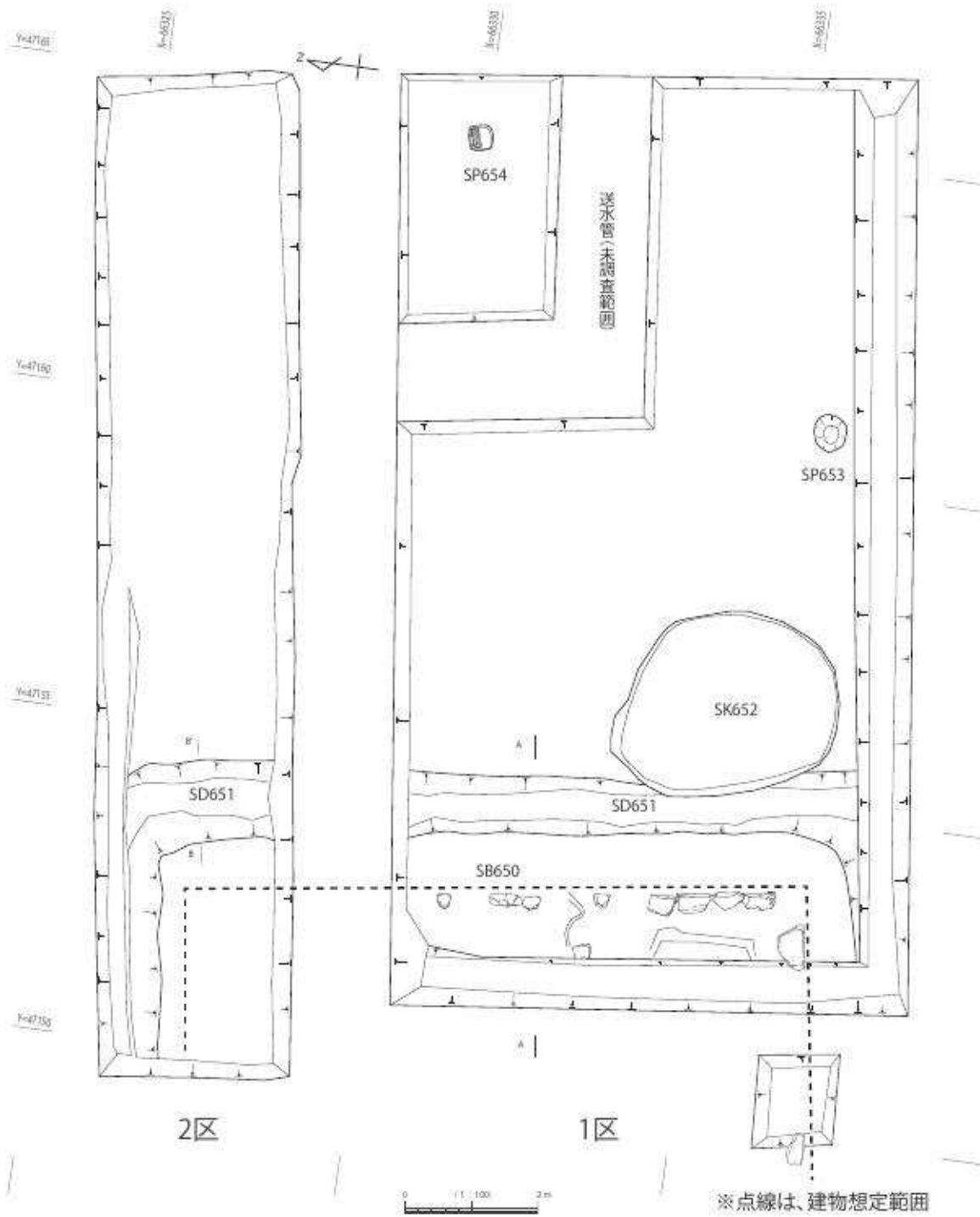
ピット SP653・SP654（第8図） SP653は性格不明、SP654は、ピットの底に敷かれた板材に帶鋸痕が見られることから、明治以降の遺構と思われる。用途は不明である。

2 II層上面の遺構

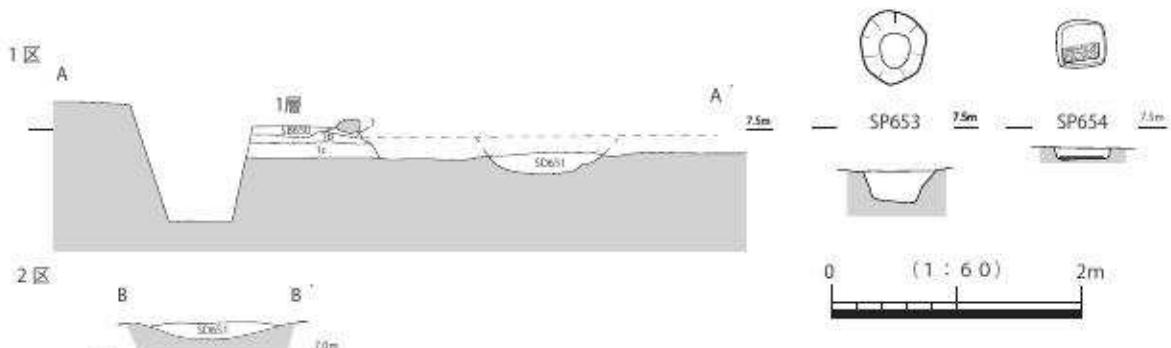
II層上面で確認した遺構としては、ピットや土坑SP655からSP685までの30の遺構を確認した（第10図・第2表）。ピットの並びなどを検討したが、規則的に並ぶ遺構は確認できず、すべてが不明遺構である。2層洪水層の上層にあることから、近世初期の遺構と考えられる。

3 III層上面の遺構

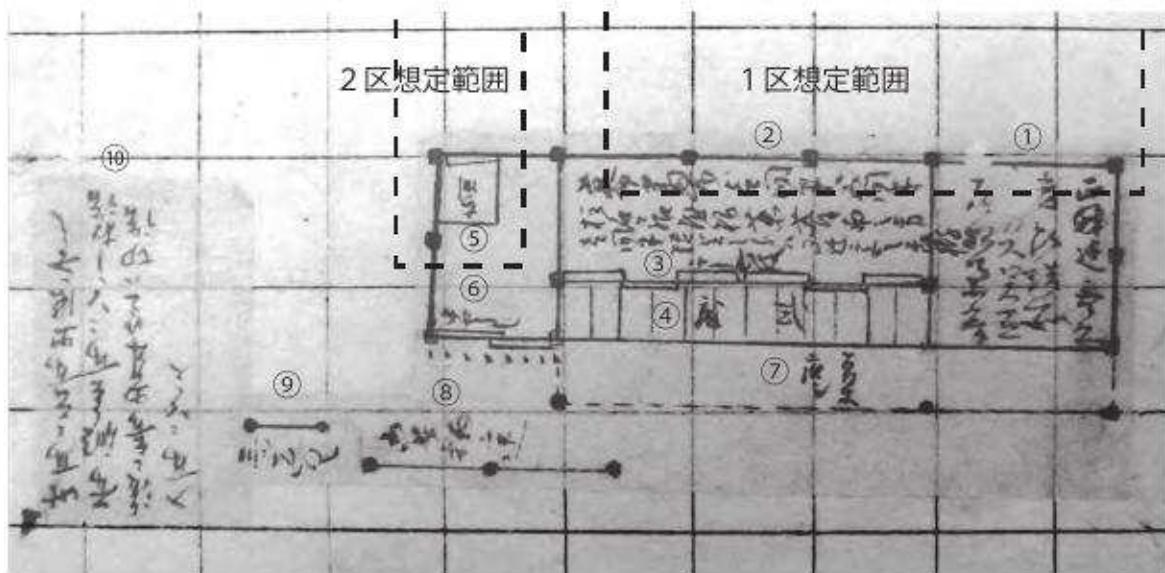
III層上面で確認した遺構としては、ピットや土坑SP686からSP708までの22の遺構を確認した（第11図・第3表）。ピットの並びなどを検討したが、規則的に並ぶ遺構は確認できず、すべてが不明遺構である。また、炭化物が面的に広がる状況も確認している。性格については、火災などによる廃棄物の可能性が考えられるが、不明確である。炭化物については、試料を採取して年代測定を実施した結果、1488年から1640年という年代が得られている（第4章）。



第7図 I b層上面遺構平面図



第8図 I b層上面遺構平面図・断面図



【解説】

・□は掠れ、破損で文字が判読できないが、文字数は判明する部分。
・△は、掠れ、破損で文字が判読できず、文字数も推定できない部分。
○内は文字を推定した部分。

【書き下し】

①正遷宮の者頭 (ものがしら、松江藩の役職?) 詰所、一
「ス四尺圓 屋根裏葺き

②幕番所、一間半(二・七寸)に五間半(九・七寸)、柱石居屋根裏葺き、南の方一間半(一・七寸)離ぎ足しの分は、

柱石居屋根裏葺き

七寸)、柱石居(すゑ)、屋根裏葺き、南の方一間半(一・七寸)離ぎ足しの分は、正遷宮の節構え

七寸)

③戸六枚

④式台

⑤土間

⑥中障子 (中障子)

⑦曾木底シ

⑧御長柄口

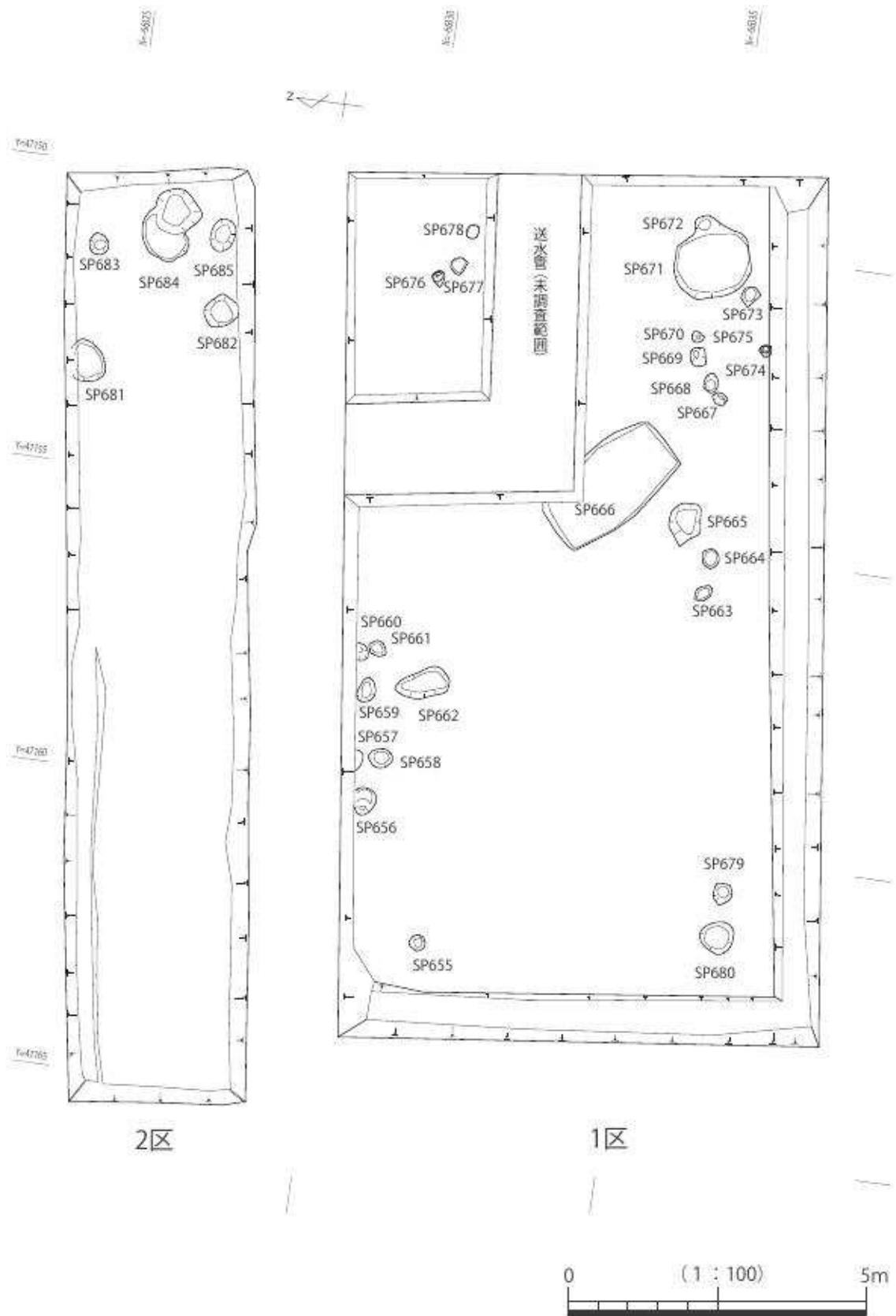
⑨三ツ口口 (道具カ)

⑩三ツ口口 (道具?)

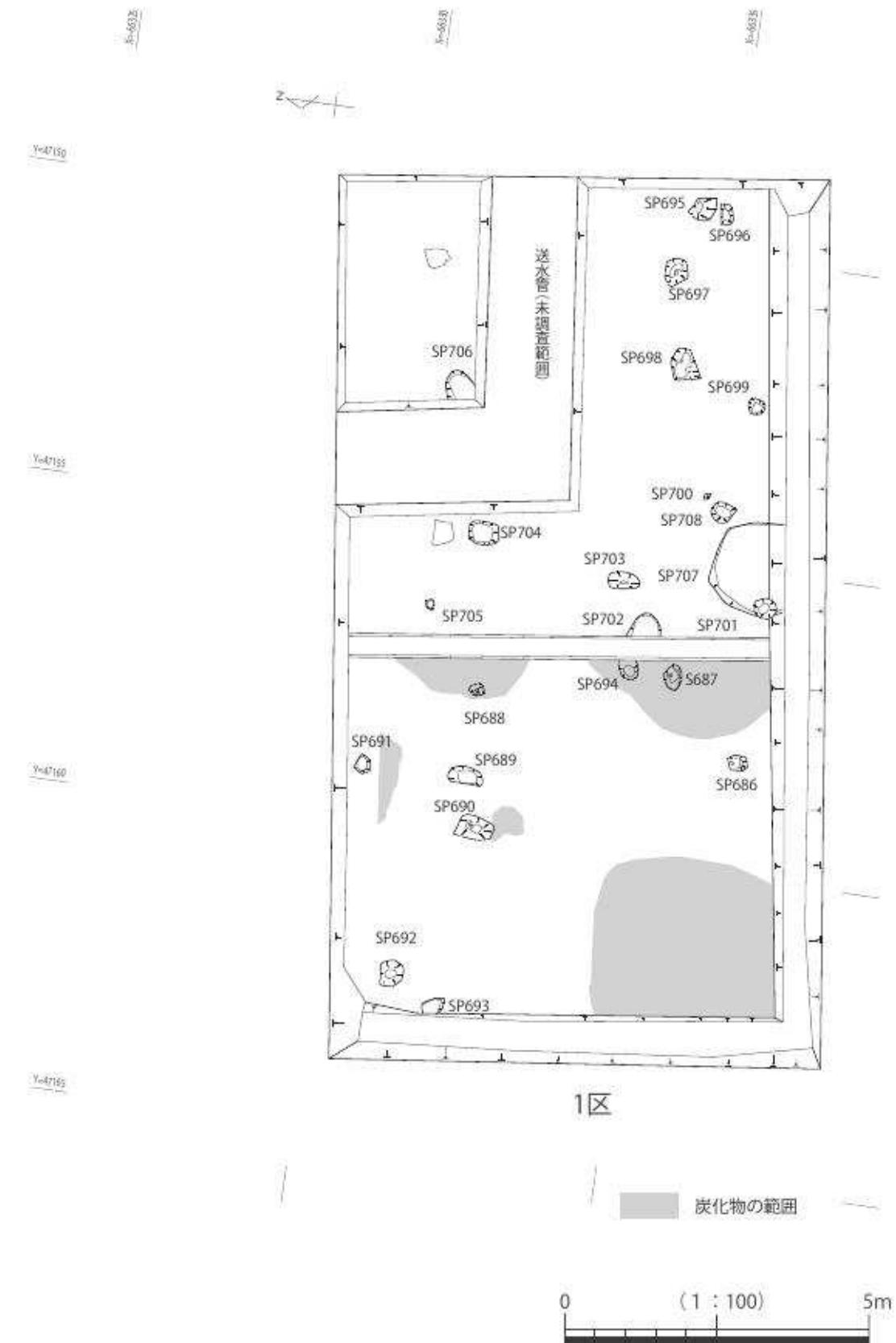
●この所に会所の出張(でぱり?)これ無く、前仮会所に致し相詰め、後会所出来候上は、切り詰め入所に致す。

●此所二会所出張無之
前仮会所二いたし相詰
後会所出来候上ハ切詰
入所二いたス

第9図 『出雲大社全図(部分)』にみえる仮設建物(一部加筆)



第10図 II層上面遺構平面図



第11図 III層上面遺構平面図

第2表 II層上面遺構一覧表

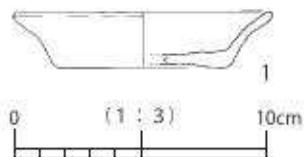
遺構名	地区	規模 (m)			主要埋土	時期
		長さ	幅	深さ		
SP655	1区	0.25	0.25	0.19	にぶい黄褐色砂質土	近世前半
SP656		0.49	0.31	0.11		
SP657		0.38	0.12	0.14		
SP658		0.40	0.32	0.07		
SP659		0.39	0.27	0.11		
SP660		0.30	0.18	0.14		
SP661		0.27	0.25	0.10		
SP662		0.91	0.45	0.06		
SP663		0.32	0.22	0.03		
SP664		0.30	0.25	0.12		
SP665		0.71	0.50	0.23		
SK666		2.25	1.15	0.10		
SP667		0.30	0.10	0.09		
SP668		0.30	0.20	0.09		
SP669		0.30	0.21	0.06		
SP670		0.15	0.15	0.02		
SK671		1.21	0.98	0.23		
SP672		0.32	0.30	0.16		
SP673		0.31	0.29	0.09		
SP674		0.15	0.15	0.12		
SP675		0.15	0.15	0.04		
SP676		0.29	0.20	0.14		
SP677		0.29	0.25	0.04		
SP678		0.20	0.18	0.04		
SP679		0.35	0.30	0.09		
SP680		0.55	0.52	0.21		
SP681	2区	0.70	0.60	0.10	灰黄褐色砂質土	近世前半
SP682		0.58	0.48	0.15		
SP683		0.35	0.30	0.20		
SK684		1.15	0.68	0.22		
SP685		0.52	0.39	0.19		

第3表 III層上面遺構一覧表

遺構名	地区	規模 (m)			主要埋土	時期
		長さ	幅	深さ		
SP686	1区	0.29	0.29	0.24	暗灰黄褐色粘質土	中世後半 ↓ 近世前半
SP687		0.39	0.29	0.32		
SP688		0.25	0.25	0.19		
SP689		0.60	0.25	0.19		
SP690		0.50	0.39	0.35		
SP691		0.31	0.30	0.90		
SP692		0.40	0.39	0.13		
SP693		0.32	0.30	0.09		
SP694		0.30	0.28	0.08		
SP695		0.48	0.40	0.38		
SP696		0.32	0.18	0.14		
SP697		0.48	0.40	0.19		
SP698		0.50	0.50	0.08		
SP699		0.30	0.25	0.10		
SP700		0.10	0.10	0.07		
SP701		0.35	0.30	0.20		
SP702		0.51	0.48	0.25		
SP703		0.48	0.30	0.25		
SP704		0.35	0.30	0.18		
SP705		0.15	0.10	0.08		
SP706		0.45	0.40	0.20		
SK707		1.45	1.20	0.14		
SP708		0.30	0.30	0.12		

第4節 遺物

出土した遺物について、層位および遺構に伴うものと、伴わないものとに分け記述する。



1 I層出土遺物

第12図 SD651出土遺物実測図

(1) 遺構に伴う遺物（第12図）

遺構に伴う遺物として、溝SD651出土の中世土師器の皿1点のみである。

(2) 遺構に伴わない遺物（第13・14図、図版9）

遺構に伴わない遺物は、2～87までの遺物である。そのなかでもさらにIa・Ib・Icと層位ごとに確認している。Ia層出土遺物としては、2～18の遺物である。中世土師器の杯・皿が主で、3は、底面静止糸切りである。16は、17世紀の肥前系磁器碗である。見込み部と豊付けに胎土目積痕が残る。17は、手づくね成形の京都系土師皿口縁部である（鰐淵寺分類皿IA類・16世紀）。18は、古墳時代の土師器甕口縁部である。

Ib層出土遺物は、19～58である。Ia層同様、中世土師器の皿が主で、19～25の中世土師器皿は、底部からほぼ垂直に立ち上がるるもので近世初頭のものと推定される。26～57は中世土師器皿で16世紀後半以降17世紀初頭のものでまとまって出土している。58は、手づくね成形の京都系土師皿の底部である（鰐淵寺分類皿IA類）。

Ic層の出土遺物は、59～67である。59～65は、中世土師器の皿である。66は、肥前系陶器の碗である。67は、手づくね成形の京都系土師皿の口縁から体部である（鰐淵寺分類皿IIB-b類）。

また、Ia・Ib・Icの分別が明確にできなかった遺物は、I層として取り上げた。68～84までが皿、85は壊、86は、口径10.8cmの大型の皿である。87は、手づくね成形の京都系土師皿の口縁から体部である（皿IA類）。

2 II層出土遺物（第14図、図版9）

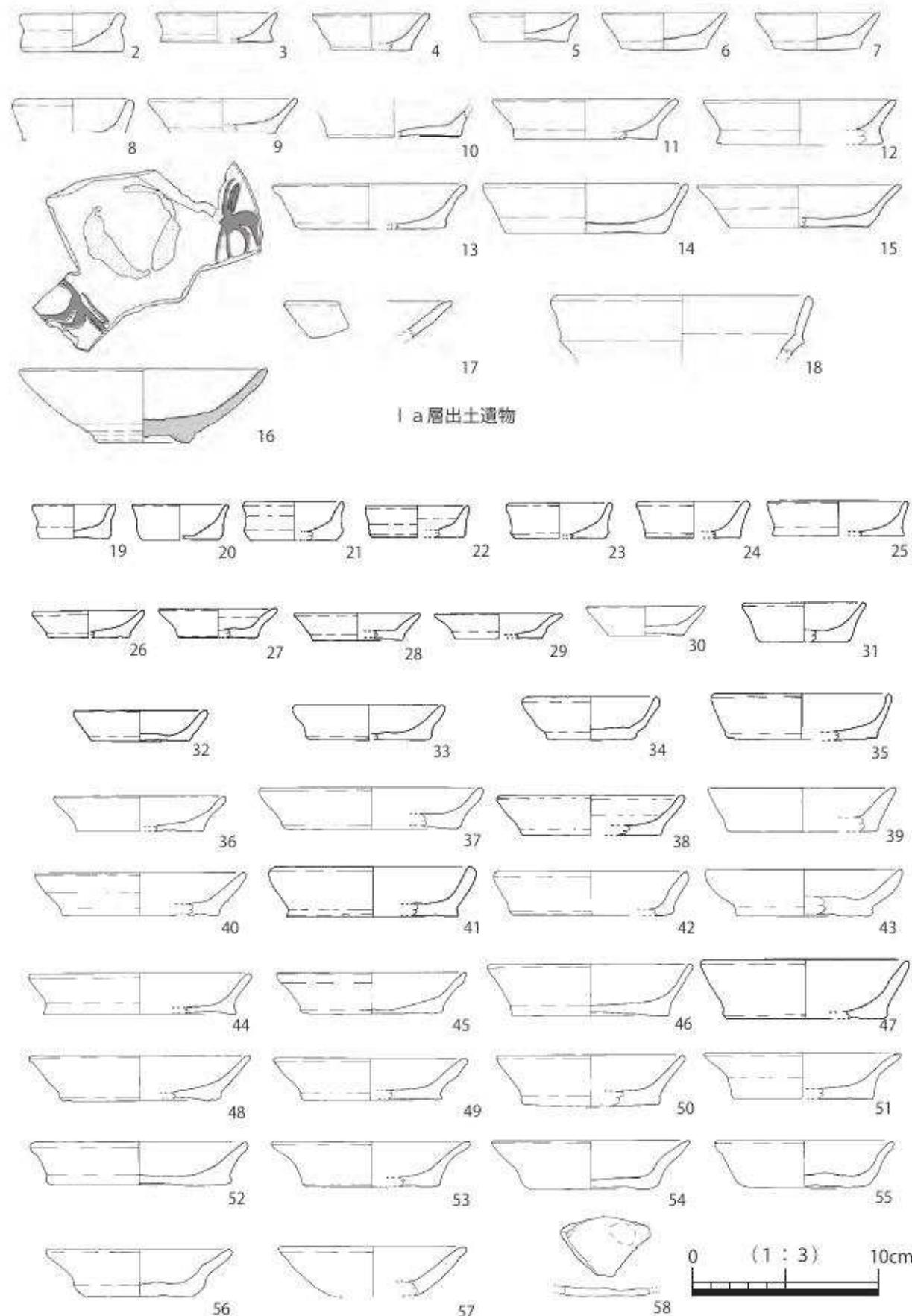
II層では遺構に伴う遺物は出土していない。

遺物の出土量は少なく、88～91の土師器皿4点である。88の中世土師器皿は、底部からほぼ垂直に立ち上がるるもので近世初頭のものと推定される。

3 III層出土遺物（第14～16図、図版10）

III層では遺構に伴う遺物は出土していない。遺構に伴わない遺物は、92～145である。そのなかでもさらにIIIa・IIIb・IIIcと層位ごとに確認している。

銭1は、元豊通寶（初鑄年1078年）の模鋳銭でIII層上面の出土である。IIIa層の遺物としては、92～131である。92は、弥生土器壺の頸部であり、外面上に羽状文がある。93は、古墳時代の土師器甕の頸部である。94～117は、中世土師器の杯である。口径は、6～7cm、器高1.7～2.1の小

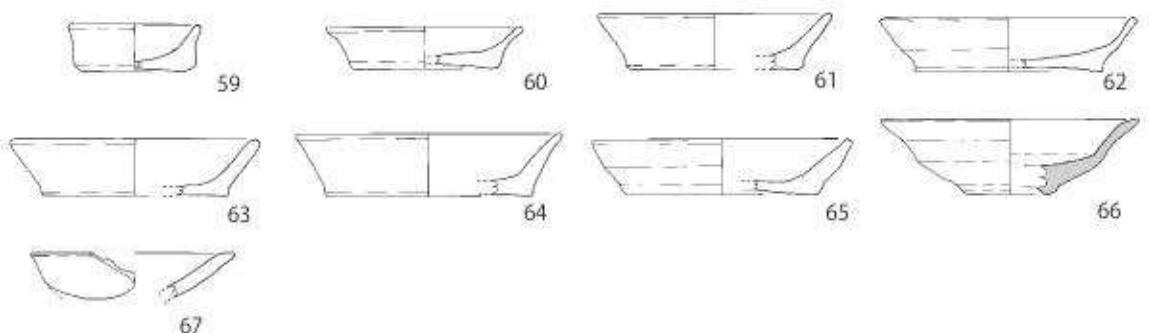


I a 層出土遺物
第13図 I a・I b層出土遺物実測図

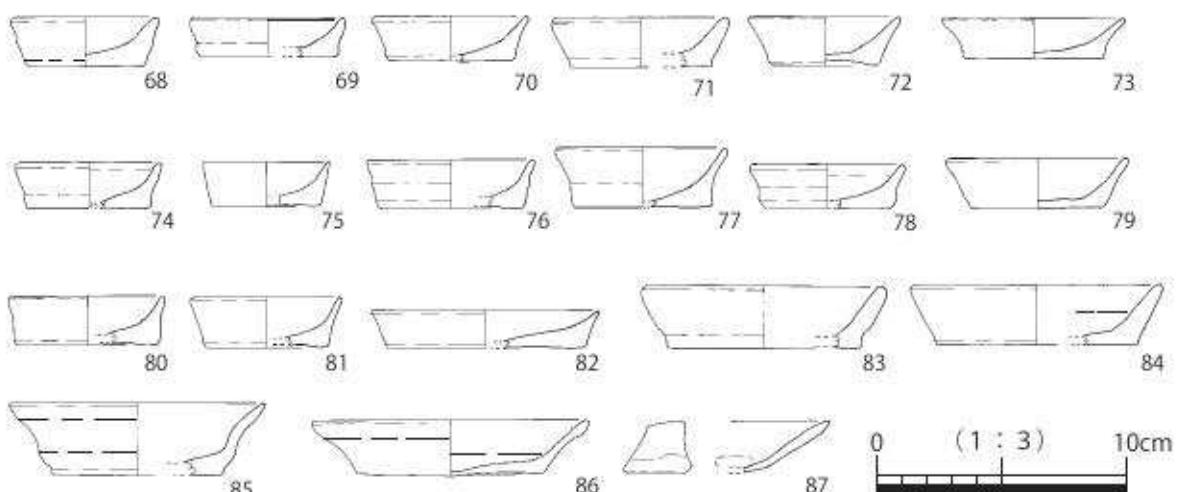
型の杯と、口径 10 ~ 13cm、器高も 3.1 ~ 4.0cm と大型の杯がある。118 ~ 131 は、柱状高台付杯で 13 世紀代である。すべて杯部は欠損している。

III b 層出土遺物としては、132 ~ 141 の中世土師器である。136・140 は、口径 10cm 前後で、体部が内湾気味に立ち上がる。鰐淵寺分類 D 類（13 世紀後半）のものであろう。

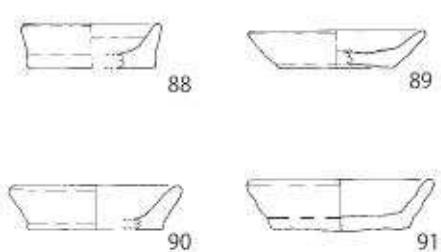
III c 層出土遺物としては、142 ~ 145 の遺物である。142 は、土師器の甕口縁部である。143 ~ 145 は、高台付の杯であり、12 世紀代の遺物であろう。



I c 層出土遺物



I a ~ c 層出土遺物

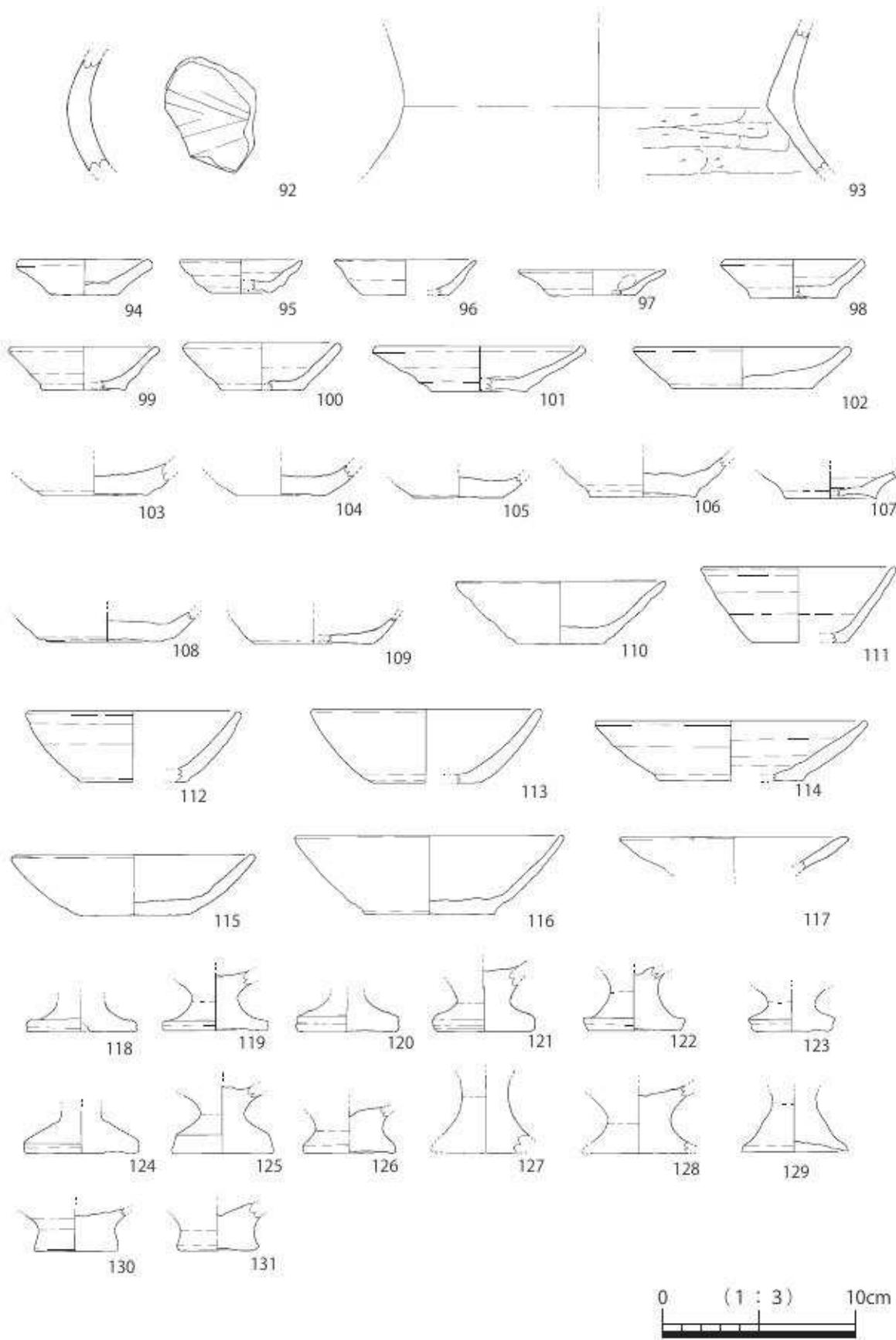


II 層出土遺物

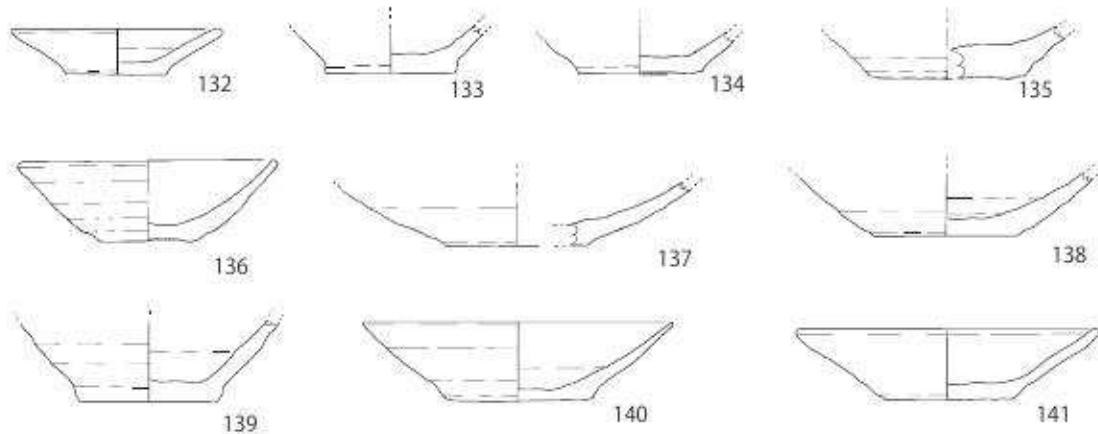


III 層上面出土銭貨
0 (1 : 1) 2cm

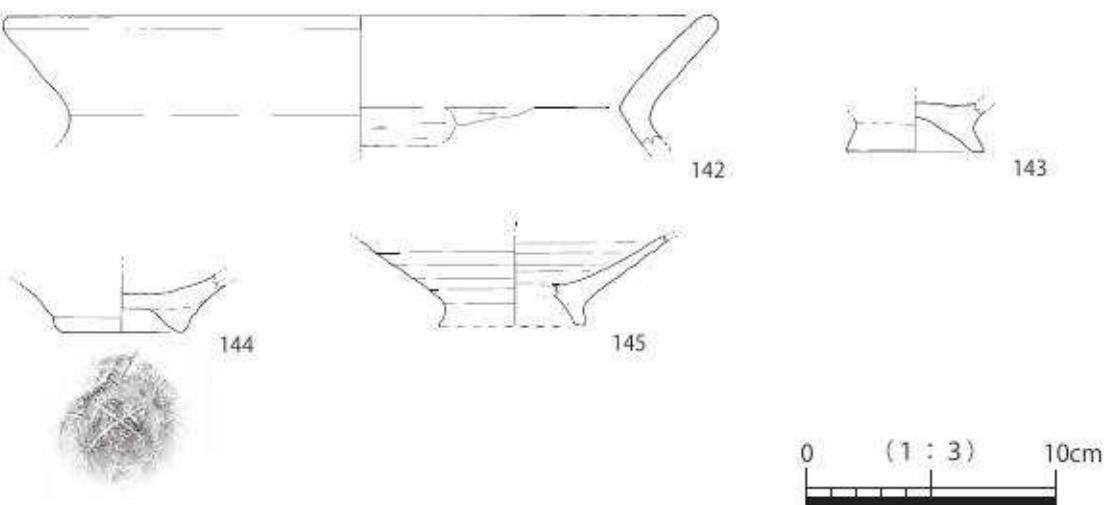
第14図 Ic・Ia～c・II・III a層出土遺物実測図・拓影図



第15図 III a層出土遺物実測図



III b 層出土遺物



III c 層出土遺物

第16図 III b・III c層出土遺物実測図

第4表 出土遺物観察表(1)

辨別 番号	出土位置		器種 種別	法量(単位:cm)			形態・調整・文様の特徴	胎土	色調	備考
	調査区	造構 (出土位置)		口径 (復元値)	底径 (復元値)	高さ (復元値)				
1	I区	SD651	皿 (中土器)	(10.1)	(6.7)	2.1	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	灰	
2	I区		皿 (中土器)	(5.2)	(5.1)	2.1	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	浅い橙	
3	I区		杯 (中土器)	(6.3)	(5.8)	1.6	外: ナデ 底部: 静止系系切り 内: ナデ	密	橙	
4	I区		皿 (中土器)	(5.9)	(4.2)	2.0	外: 目転ナデ 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	底部: 駒歛
5	I区		皿 (中土器)	5.6	4.4	1.5	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	橙	
6	I区		皿 (中土器)	(6.3)	(4.6)	2.0	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	橙	
7	I区		皿 (中土器)	(6.5)	(4.4)	2.0	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	橙	
8	I区		杯 (中土器)	(5.9)	(5.2)	2.2	外: ナデ 底部: 回転系切り 内: ナデ	密	淡黄橙	
9	I区		皿 (中土器)	(7.7)	(5.5)	1.9	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
10	I区		皿 (中土器)	—	6.5	(1.4)	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	橙	
11	I区		皿 (中土器)	(9.7)	(7.5)	2.1	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
12	I区		皿 (中土器)	10.0	8.5	2.4	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
13	I区		皿 (中土器)	10.0	3.7	2.3	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	浅い橙	
14	I区		皿 (中土器)	(10.8)	(8.0)	2.6	外: ナデ 内: ナデ	密	淡橙	
15	I区		皿 (中土器)	(10.6)	(7.2)	2.2	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	橙	
16	I区		碗 (清流青器)	(12.9)	(6.8)	3.9	外: 目転ナデ 緩 土どめ痕 内: 目転ナデ 緩 土どめ痕	密	橙	
17	I区		皿 (中土器)	—	—	—	外: ナデ 内: ナデ	密	淡黄橙	
18	I区		甕 (土器)	(13.4)	—	(3.1)	外: ナデ 内: ナデ	密	淡黄橙	(京都市 東山A殿)
19	I区		皿 (中土器)	(4.4)	(4.3)	1.8	外: 回転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
20	I区		皿 (中土器)	5.1	4.4	1.9	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	橙	
21	I区		皿 (中土器)	(5.2)	(4.5)	2.1	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	浅い黄橙	
22	I区		杯 (中土器)	(5.4)	(4.7)	1.7	外: ナデ 底部: 回転系切り 内: ナデ	密	浅い橙	
23	I区		杯 (中土器)	(5.4)	(4.7)	1.8	外: ナデ 底部: 回転系切り 内: ナデ	密	浅い橙	
24	I区		皿 (中土器)	(5.8)	(6.0)	2.0	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	底部: 不明瞭
25	I区		皿 (中土器)	(7.1)	(6.4)	1.8	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 回転ナデ	密	淡黄橙	
26	I区		杯 (中土器)	(5.8)	(4.2)	1.4	外: ナデ 底部: 回転系切り 内: ナデ	密	淡黄橙	
27	I区		皿 (中土器)	(6.2)	(4.0)	1.5	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
28	2区		皿 (中土器)	(6.5)	(4.8)	1.4	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
29	I区		皿 (中土器)	(6.6)	(4.5)	1.9	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	淡橙	
30	I区		皿 (中土器)	(6.2)	(4.0)	1.5	外: 目転ナデ 底部: 目転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
31	I区		皿 (中土器)	(6.4)	(4.7)	2.1	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 回転ナデ	密	浅い橙	
32	I区		皿 (中土器)	(6.9)	(5.0)	1.6	外: 回転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
33	I区		皿 (中土器)	(7.8)	(6.1)	1.8	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
34	I区		皿 (中土器)	(6.9)	(4.7)	1.8	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	
35	I区		皿 (中土器)	(9.3)	(8.0)	2.4	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密		
36	I区		皿 (中土器)	(9.0)	(6.7)	1.8	外: 目転ナデ 底部: 回転系切り 内: 目転ナデ	密	淡黄橙	

第5表 出土遺物観察表(2)

査区 番号	出土位置			器種 種別	寸量(単位cm)			形態・調整・文様の特徴	胎土	色調	備考
	調査区	遺構 (出土位置)	層位		口径 (復元値)	底径 (復元値)	高さ (復元値)				
37	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(11.6)	(8.0)	2.1	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
38	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(9.6)	(7.4)	10.5	外:ナデ 底部:回転系切り 内:ナデ	密	淡黄橙	
39	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(9.8)	(8.0)	2.3	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
40	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(11.0)	(8.2)	2.2	外:回転ナデ 底留:静止系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
41	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.4)	(9.6)	2.7	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
42	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	10.0	8.4	2.3	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
43	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.3)	(6.9)	2.4	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
44	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(11.5)	(10.2)	2.1	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
45	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	10.0	7.0	2.2	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	橙	
46	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.5)	(8.2)	2.7	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
47	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.7)	(8.2)	3.1	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	橙	
48	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(11.5)	(8.0)	2.3	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
49	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.0)	(7.4)	2.2	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
50	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(9.9)	(7.3)	2.6	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密		
51	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.4)	(7.3)	2.4	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	橙	
52	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(11.4)	(8.0)	2.3	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	に赤い橙	
53	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.4)	(6.8)	2.4	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	に赤い橙	
54	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(10.3)	(6.3)	1.5	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
55	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(9.3)	(6.4)	1.4	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	に赤い黄橙	
56	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	(9.6)	(5.8)	1.4	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
57	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	10.0	—	(2.5)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
58	1区		Ib層	壺 (中段土器部)	—	—	—	外:ナデ 内:ナデ	密	灰白	(底部: 11.1 残高 7.0 分)
59	1区		Ic層	壺 (中段土器部)	5.1	4.1	1.8	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	に赤い黄橙	
60	2区		Ic層	壺 (中段土器部)	(7.8)	(5.75)	1.6	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	橙	
61	1区		Ic層	壺 (中段土器部)	9.1	7.0	2.2		密	橙	全体上擦減
62	1,2区		Ic層	壺 (中段土器部)	(10.1)	(7.4)	2.1	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	橙	
63	1区		Ic層	壺 (中段土器部)	(9.7)	(7.3)	2.2	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
64	1,2区		Ic層	壺 (中段土器部)	(10.4)	(8.0)	2.5	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
65	1区		Ic層	壺 (中段土器部)	(10.1)	(7.6)	2.2	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
66	2区		Ic層	蓋 (肩部)	10.0	3.2	3.0	外:回転ナデ 蓋 内:回転ナデ 蓋	密	灰オリーブ に赤い赤褐色	
67	1,2層		Ic層	壺 (中段土器部)	—	(1.8)	—	外:ナデ 内:ナデ	密	淡黄橙	(底部: 11.1 残高: 8.5 分)
68	1区		I層	壺 (中段土器部)	(5.6)	(4.3)	2.0	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
69	1区		I層	壺 (中段土器部)	(5.9)	(5.2)	1.5	外:ナデ 内:ナデ	密	橙	
70	1区	SX652	I層	壺 (中段土器部)	—	4.8	1.7	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
71	1区		I層	壺 (中段土器部)	(6.8)	(5.5)	1.9	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
72	1区		I層	壺 (中段土器部)	(5.9)	(4.0)	1.9	外:回転ナデ 底留:回転系切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	

第6表 出土遺物観察表(3)

検査 番号	出土位置			器種 種別	重量(単位: g)			形態・調整・文様の特徴	胎土	色調	備考
	調査区	遺構 (出土位置)	層位		口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (復元値)				
73	I区		I層	皿 (中性土器)	(7.2)	(5.3)	1.6	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	に赤い模	
74	I区		I層	皿 (中性土器)	(5.4)	(4.8)	1.8	外: ナデ 底部: 回転条切り 内: ナデ	密	浅黄橙	
75	I区		I層	皿 (中性土器)	(5.2)	(4.4)	1.8	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	に赤い模	
76	I区		I層	皿 (中性土器)	(6.4)	(5.6)	1.9	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	底部: 不明
77	I区		I層	皿 (中性土器)	(6.6)	(5.4)	2.3	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	白	
78	I区		I層	杯 (中性土器)	(6.0)	(4.8)	1.7	外: ナデ 底部: 回転条切り 内: ナデ	密	に赤い模	
79	I区		I層	皿 (中性土器)	(7.0)	(5.1)	2.0	外: 回転ナデ 底部: 静止条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
80	I区		I層	皿 (中性土器)	(6.0)	(5.6)	1.9	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
81	I区		I層	皿 (中性土器)	5.9	4.8	1.9	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	に赤い模	
82	I区		I層	皿 (中性土器)	—	(7.6)	(1.4)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	に赤い模	
83	I区		I層	皿 (中性土器)	(9.2)	(7.4)	2.5	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
84	I区		I層	皿 (中性土器)	(9.8)	(7.8)	2.3	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
85	I区		I層	杯 (中性土器)	(10.0)	(6.6)	1.8	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	白	
86	I区		I層	皿 (中性土器)	10.8	7.2	2.2	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
87	I区		I層	皿 (中性土器)	—	—	—	外: 浅暗 内: 指押え	密	浅黄橙	古暮系・直口A期
88	I区		II層	杯 (中性土器)	(5.2)	(5.0)	1.7	外: ナデ 底部: 回転条切り 内: ナデ	密	浅黄橙	
89	I区		II層	皿 (中性土器)	(6.8)	(4.5)	1.4	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
90	I区		II層	皿 (中性土器)	6.5	5.2	1.7	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
91	I区		II層	皿 (中性土器)	(7.1)	(5.4)	2.0	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
92	I区		IIIa層	甕 (発生土器)	—	—	(5.7)	外: ナデ 羽状文 内: ナデ	密	灰白	
93	I区		IIIa層	甕 (土器)	—	—	(7.5)	外: ナデ 内: ナデ ケズリ	密	外: に赤い黄相顔面 - 10.0 内: 浅黄橙	
94	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(6.4)	(3.6)	1.8	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ 指押え	密	浅黄橙	
95	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(6.3)	(3.0)	1.7	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
96	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(7.1)	(4.4)	(1.8)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
97	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(5.4)	(4.4)	1.3	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ 指押え	密	に赤い模	
98	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(7.0)	(4.4)	(2.0)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
99	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(7.3)	(4.2)	2.2	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
100	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(7.8)	(4.2)	2.4	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
101	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(10.4)	(4.8)	1.3	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	外: 浅黄橙 内: に赤い模	
102	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	(10.8)	(7.2)	2.1	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
103	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	—	5.3	(1.7)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
104	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	—	4.4	(1.5)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
105	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	—	4.6	(1.1)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
106	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	—	5.4	(2.1)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
107	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	—	4.6	(1.4)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	
108	I区		IIIa層	杯 (中性土器)	—	5.8	(1.6)	外: 回転ナデ 底部: 回転条切り 内: 回転ナデ	密	浅黄橙	

第7表 出土遺物観察表(4)

辨認番号	出土位置			器種 種別	法量(単位cm)			形態・調整・文様の特徴	胎土	色調	備考
	調査区	遺構 (出土位置)	層位		口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (復元値)				
109	2区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	—	(6.0)	(1.3)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	概	
110	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(10.7)	(4.5)	3.2	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
111	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(9.8)	(4.8)	3.9	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
112	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(10.6)	(5.4)	3.6	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
113	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(11.4)	(5.6)	3.8	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
114	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(12.7)	(7.4)	3.4	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
115	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(12.2)	(5.3)	3.0	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	灰白	
116	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	(13.0)	(6.6)	4.0	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
117	1区		IIIa層 (中段土縫部)	杯	11.6	—	(2.8)	外:ナデ 内:ナデ	密	淡黄橙	
118	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	5.6	(1.6)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	概	
119	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	6.2	(7.5)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
120	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	5.0	(2.2)		密	淡黄橙	全体:摩滅
121	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	4.6	(3.25)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:ナデ	やや密	に赤い模	
122	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	4.7	(2.9)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	に赤い模	
123	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	3.8	(2.1)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
124	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	5.8	(2.2)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	概	
125	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	(5.9)	(3.0)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	やや密	に赤い模	
126	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	4.8	(2.3)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
127	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	—	(4.5)	外:ナデ 内:ナデ	やや密	に赤い模	
128	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	—	(2.9)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	やや密	概	
129	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	5.4	(3.0)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	概	
130	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	4.1	(2.2)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	やや密	に赤い模	
131	1区		IIIa層 (中段土縫部)	柱状高台付杯	—	3.7	(2.3)	外:ナデ 内:ナデ	密	淡黄橙	底部:摩滅
132	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	(8.2)	(6.0)	1.8	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ	密	淡黄橙	
133	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	—	(5.2)	(2.0)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
134	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	—	(4.8)	(1.6)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
135	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	—	(6.2)	(2.0)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
136	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	(10.4)	(5.4)	(3.3)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
137	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	—	(5.6)	(2.5)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
138	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	—	(5.6)	(2.5)	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
139	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	—	(4.0)	3.1	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
140	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	(12.5)	(5.6)	3.1	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
141	1区		IIIb層 (中段土縫部)	杯	(11.8)	(5.0)	2.9	外:回転ナデ 底部:回転糸切り 内:回転ナデ ナデ	密	淡黄橙	
142	1区		IIIc層 (土壌部)	甕	(28.0)	—	(4.8)	外:ナデ ケズリ 内:ナデ	やや密	に赤い模	
143	1区		IIIc層 (土壌部)	高台付杯	—	5.3	(1.9)	外:ナデ 内:回転ナデ ナデ	粗	淡黄橙	
144	1区		IIIc層 (土壌部)	高台付杯	—	(4.7)	(2.3)	外:回転ナデ つきだし ナデ 内:回転ナデ ナデ	やや密	概	

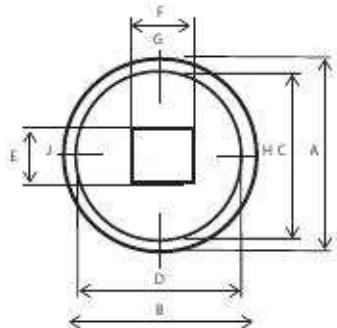
第8表 出土遺物観察表(5)

掲 録 番 号	出土位置			器種 種別	寸法(単位:cm)			形態・調査・文様の特徴	粘土	色調	備考
	調査区	遺構 (出土位置)	層位		D径 (裏元値)	底径 (裏元値)	高さ (裏元値)				
145-	118		田e層	高台付杯 (中腹上部)	-	-	(2.6)	外：印版ナガ 内：印版ナガ	ナメル質	土赤い黄褐	

第9表 出土遺物観察表(6)

単位: cm

掲 録 番 号	種類	外径		内径		孔径		孔の形		厚み				重置 g.
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J			
銭1	元豐通宝	2.34	2.35	1.81	1.76	0.64	0.61	四角	0.07	0.07	0.09	0.08	2.24	



錢貨計測位置

第4章 自然科学分析（AMS年代測定）

第1節 はじめに

本報告は、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市からの委託を受け、出雲大社境内遺跡の形成時期を明らかにする目的で、出雲大社境内遺跡の収蔵庫建設時の発掘調査に伴い実施・報告したAMS年代測定についての報告書を再編したものである。

第2節 測定試料について

年代測定試料（炭層1-①、1-②）は、平面図（第17図）に示した地点で、「火災の痕跡とみられる炭層」から採取されていた。現地の層序は上位から、I層：造成土の層（江戸時代以降）、II層：海砂または、砂丘の砂の二次堆積層（江戸時代初め頃か）、III層：土石流の層（中世）とされている。「炭層」は、堆積時期不明のII層下位で、土石流堆積物（III層）に狭在される。

第3節 AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.3 (Bronk Ramsey 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al. 2013) を利用した。

第4節 AMS年代測定結果

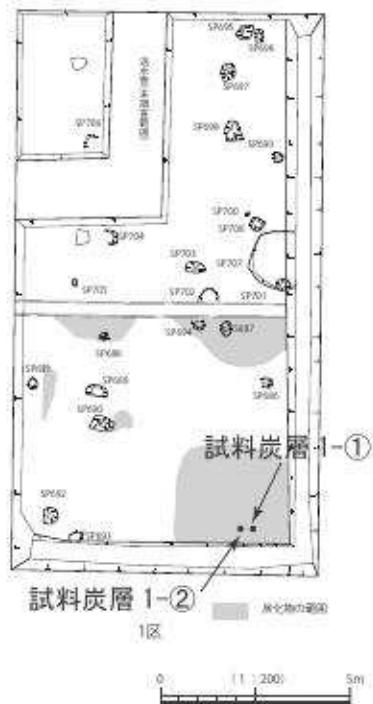
年代測定結果を第10表及び第18図に示す。第19図には、OxCal ver. 4.3 (Ramsey 2009) による試料ごとの暦年較正図を示した。第10表には、試料の詳細、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の年代を示している。

第5節 年代測定値について

第18図に、AMS年代測定値の分布を示す。

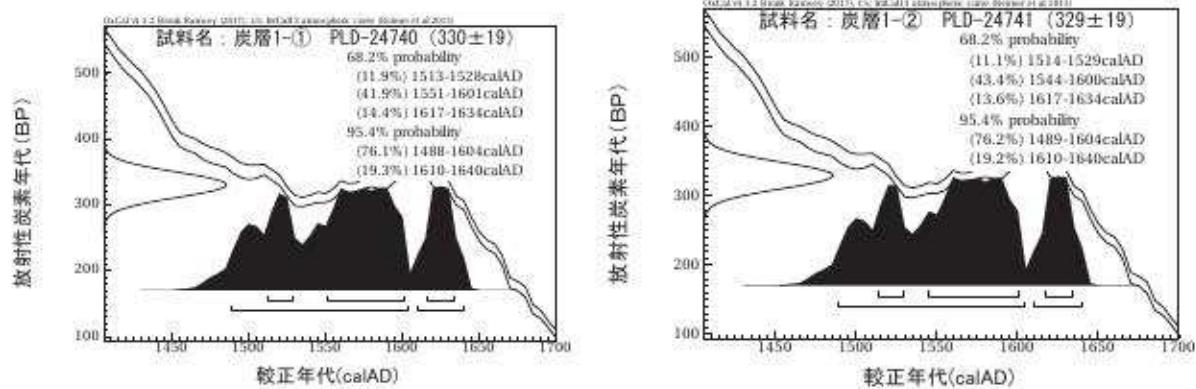
炭層1-①はAD1488～1640年、炭層1-②はAD1489～1640と、ほぼ同じ年代値が得られた。この値は、「炭層」の含まれるIII層の推定時期である中世以降で、江戸時代以降とされるI層以前の値であった。

III層は「土石流の層」とされているが、幾つかのユニットに細分されている。試料が採取された「火災の痕跡とみられる炭層」

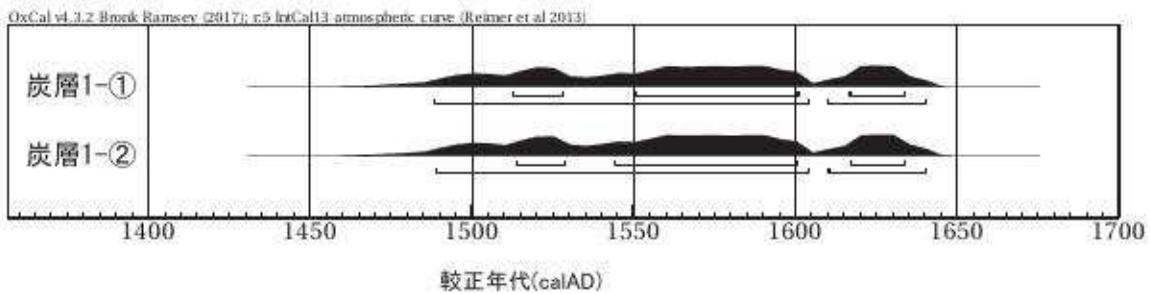


第10表 AMS年代測定結果

試料名	種別	出土地点ほか	重量(g)	測定年代 ¹ (yr BP±1σ)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (yr BP±1σ)	補正年代 ² (yr BP±1σ)	曆年較正年代		測定番号 (PLD-)
								1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲	
炭層1-①	炭化材	炭層1	4.7759	344±19	-25.82±0.16	330±19	330±20	AD1513-1528(11.9%) AD1551-1601(41.9%) AD1617-1634(14.4%)	AD1488-1604(76.1%) AD1610-1640(19.3%)	24740
炭層1-②	炭化材	炭層1	1.4363	279±19	-21.91±0.21	329±19	330±20	AD1514-1529(11.1%) AD1544-1600(43.4%) AD1617-1634(13.6%)	AD1489-1604(76.2%) AD1610-1640(19.2%)	24741

¹ $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代² $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代

第18図 曆年較正結果



第19図 曆年較正値の分布

がⅢ層に狭在されることも、Ⅲ層が一度の土石流（洪水）で堆積したものではないことを示唆している。これらのことから、中世から近世初期に度々発生した土石流の合間に、「炭層」が堆積した（あるいは埋土、盛り土の一部？）可能性が示唆される。
(渡辺正巳)

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第5章 小結

出雲大社境内南東部にある美術工芸品収蔵施設の建設に先立ち、2013年（平成25）度から2か年にわたり埋蔵文化財発掘調査を実施した。「杵築大社近郷絵図」、「社縦絵図」、「出雲大社全図」などの絵図や指図を見ると、建設予定地付近には、仮設建物を除き、主要な建物が描かれていないことから、遺構が少ないと予想された箇所であった。しかし、建物跡1棟を確認したほか、性格は不明であるが、多くのピット、土坑が見つかった。また、比較的多くの中世土師器が出土するという成果も得ることができた。

なかでも、境内南東部を面的に発掘調査することができ、掘削深度は1mながらも、層序関係を考古学的手法も用いて検証することができたことに意義がある。表土（I a：玉砂利）の下は、上から造成土の層（I b・c層）、海砂または砂丘の砂の二次堆積層（II層）、土石流の層（III層）に分けられた。そして、II層とIII層の間で、部分的ではあるが炭の分布が認められ、AMS年代測定法により、西暦1488年から1640年（室町時代中頃から江戸時代前期）と判明した。

I b層上面は、境内ほぼ全域で確認できる寛文度の造成土を基盤に、その後の延享度、文化度、明治度、昭和度の遷宮の際に、建物の解体、造営などが行われている面である。I b層上面で見つかった建物跡は、層序関係と「出雲大社全図」における建物の配置から、文化度遷宮にあたり建てられた仮設建物の可能性が考えられる。一方、SP654は、底に敷かれた板材に帶鋸痕が見られることから、明治以降の遺構である。また、境内南西部では、このI b層上面に対応する面から延享度庁舎の遺構が見つかっている（出雲市教育委員会 2017）。わずか50cmほどの造成土層ではあるが、幾重にも遺構が重なり、寛文度以降の境内利用の痕跡が凝縮された層と言える。

次に、II層は、海浜や砂丘に見られる粒がそろった石英砂を主とした層で、水に流されて堆積した痕跡が認められた。そしてIII層は、人頭大の石が含まれており、これを押し流す程度の小規模な土石流が吉野川で繰り返されたとわかる。このことは、『大社御造営日記』には、「慶安元年（1648）6月21日の洪水で山が崩れ、境内に土砂が流入した」という記載、炭の年代測定からも、II層とIII層は中世から近世初頭の堆積層と推測される。今回見つかった洪水層（II層）は、この記述を裏付け、さらに、中世において、出雲大社境内では、幾度もの土砂被害に見舞われていたことがわかった。III層上面は、固く締まり、一部土壌化していることから、かつての地表面と考えられる。

境内の地盤については、過去21次にわたり行われてきた発掘調査で土層が記録され、各所との層位のつながりについては繰り返し検討が行われている。これまでの研究成果と、AMS年代測定法で判明した年代との齟齬はなく、具体的な年代を与えることができた点で重要である。

本調査のもう一つの意義は、比較的多い出土遺物がある。I層中では、中世末から近世初頭の中世土師器が多数出土した。II層の遺物は少ないが、III層では、多くが細片であるものの、弥生土器、古墳時代の土師器、中世土師器も出土した。なかでも、柱状高台付壺の出土量は、過去の調査と比較しても数多く出土した。I層は造成土、III層は吉野川の氾濫による土石流の層であり、他所から運ばれ

てきたものであろうが、中世土師器の出土量からすると、この時期に大量消費していたことがうかがわれる。

【参考文献】

出雲大社社務所 2001『出雲大社由緒略記』

出雲市教育委員会 2017『平成28年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡』出雲市の文化財報告 35

大社町教育委員会 2004『出雲大社境内遺跡』

大社町史編集委員会編 1991『大社町史 上巻』大社町

大社町史編集委員会編 2002『大社町史 史料編(民俗・考古資料)』大社町

島根県古代文化センター編 2002『島根県の歴史を語る古文書 出雲大社文書—中世杵築大社の造営・祭祀・所領—』

奈良文化財研究所 2003『出雲大社社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会

第6章 総括

第1節 平成の大遷宮に伴う関連調査

本報告により「平成の大遷宮」に伴う出雲大社境内遺跡の一連の発掘調査報告が終了したことになる。ここで、平成の大遷宮に伴う発掘調査の成果をまとめておきたい。

調査は、2007年（平成19）仮拝殿建設に伴う調査に始まり、2009年（平成21）年～2011年（平成23）防災施設工事に伴う発掘調査、2013年（平成25）美術工芸品収蔵庫建設工事に伴う発掘調査（以下、収蔵庫建設に伴う発掘調査）、2014年（平成26）収蔵庫の渡り廊下建設工事、2015（平成27）銅鳥居修理に伴う発掘調査、2013年（平成25）～2015年（平成27）環境保全事業、排水対策工事、石畳・玉砂利敷設工事、2016年（平成28）～2017年（平成29）庁舎建替え工事と約10年にわたる長期間の調査であった。

調査は、工事に伴う発掘調査・試掘調査・立会などであることから、面積が狭小の部分が多く、掘削深度も浅いところが多いいため、得られた情報は限定的であるが、一連の調査結果をまとめてみたい。

第2節 境内地造成に関する成果

1 防災工事に伴う発掘調査

境内は、吉野川、素鷦川に挟まれた扇状地に位置しており、北が高く南が低い自然地形であるため、境内の北側よりも南側の盛土が厚い傾向にある。

銅鳥居から八雲山の麓までの間225mで比高差が6.96m、銅鳥居から本殿中心までの間140mの比高差は、5.09mである。

瑞垣内北東の隅部分では、現表土の下に自然堆積の礫層が堆積しており、いわゆる「寛文度の造成土」（近世初頭の大規模な造成土）が見られなかったが、瑞垣内西部では造成土が確認できた。

また、摥社神魂御子神社本殿（筑紫社）の北側に比べて南側では造成土が厚く堆積しており、瑞垣内は、自然地形の傾斜に伴い、南の造成土が厚い傾向が確認できた。

玉垣内は、南西に向けて低くなる傾向があるものの、玉垣外（瑞垣内）と比較すれば東西方向の傾斜は僅かである。造成時に水平にしようとする意識が強かったと考えられる。

また、瑞垣の北側では全体に北東から南西にも緩やかに傾斜しており、瑞垣内にもその傾向が見られる。境内北側の素鷦社正面付近は標高11.0mであり、南の拝殿正面付近は標高8.0mとなる。その差、約3mの高低差となる。

2 収蔵庫建設に伴う発掘調査

収蔵庫建設による掘削深度は1mで、大きく3つの層に分けることができる。

収蔵庫予定地は、地表面を覆う5～10cmほどの玉砂利の下に、寛文度の造成土である層（I b・I c層）が40～50cm堆積する。黄褐色系土の層で、10cm前後の礫を含み、固く締まる。中世および近世の土師器、近世陶磁器が出土した。この層は、調査区全体で確認できる層である。なかでも、文化度造営にあたり、仮設建物が設置されたことがわかつており、掘削、整地などが繰り替えされていると考えられる。

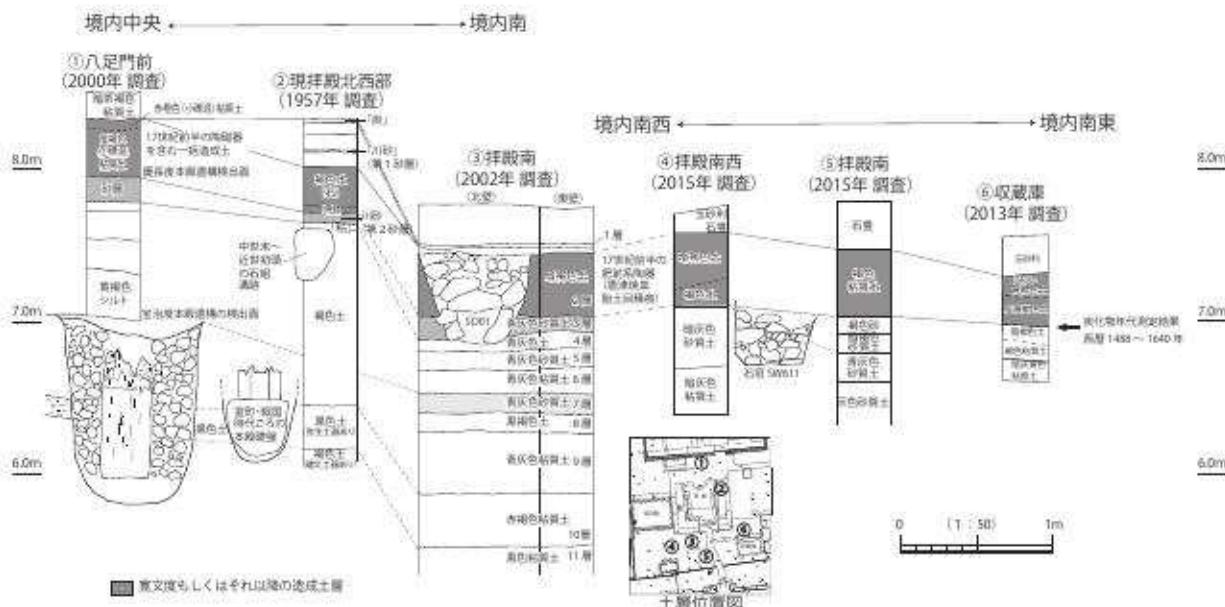
この下には、厚さ10～40cmの褐色系の海砂または砂丘の砂の二次堆積層（II層）が堆積する。粒がそろった石英砂を主とし、ラミナ状堆積、つまり、洪水によりこの層が形成されたことが分かった。調査区全面で確認した。

調査区の最下層は、中世土師器片を多量に含む土石流による堆積層（III層）である。吉野川の氾濫に伴う土石流の層と考えられ、人頭大の石を含む。上面は、固く締まり、一部土壤化していることから、かつての地表面と考えられる。調査区南西隅では、この層と砂層の間で、10cm前後の炭層が認められた。原因は不明であるが、火災などが想定される。炭化物のAMS年代測定により、1488年から1640年という年代が得られている。

3 庁舎建替えに伴う発掘調査

拝殿前の調査は、2002年（平成14）調査の拝殿南（大社町教育委員会 2004）と、2015年（平成27）調査の拝殿南西と拝殿南（出雲市教育委員会 2017）の計3回実施している。このうち、掘削深度が標高2.3mにまでおよんだ2002年の調査時の層序を参考とする。

層序は基本、上から1層表土（地表面の玉石の下は褐色粘質土）、2層寛文造成土（角礫を含む明褐色粘質土）、3層寛文造成土から慶長までの洪水砂層（青灰色砂層）、4～7層時期が明確でない洪水砂層（青灰色の粘質度と砂質土の互層）、8層推定宝治度遺構面（黒褐色粘質土）、9・10層（青灰



第20図 出雲大社境内遺跡の基本層序模式図（大社町教委 2004 を元に作成）

色及び赤褐色粘質土), 11層古墳時代前期(黒色粘質土)の順となる。

この参考とした層序と調査区の層序を比較してみると、寛文度の造成土・慶長度以降から寛文度の造成までの間に堆積した洪水砂層・その下の中世の層、さらにその下の、古墳時代・古代の遺物包含層が、ほぼ対応すると共に、標高もほぼ同じであることがわかる。拝殿南から西南にかけての層序は、ほぼ同様な堆積であると見ることができる(第20図)。

第3節 遺構に関する成果

1 銅鳥居修理に伴う発掘調査

銅鳥居の基礎構造が明らかとなった。つまり、礎石の上に鳥居の柱を据え、根巻石、据石、飼石により堅固に支えられていた。礎石とそれを支える割栗石も含め、確認できた石の広がりから、基礎の範囲は、東柱が東西2.5m以上、南北4.9m。西柱が東西2.5m以上、南北約5.0mで、深さは1.2mを超す規模と推測される。

礎石据付掘方は、東西柱間で明確な掘り込み痕跡を確認していないことから、布掘り(総掘り)と推測される。

2 収蔵庫建設に伴う発掘調査

調査区西側において地覆石である石列を確認した。石列で囲まれた建物は、『出雲大社全図』文化7年(1810)にある仮設建物(SB650)と考えられる。石が取り外されている部分もあるが、南北9.3m、東西4.0mを測る。建物周辺基壇を縁取る地覆石で、東面～南東角部分と考えられる。また、建物に伴う雨落溝を確認している(SD651)。南北方向に延び、2区では北端部が折れて西へ延びるのを確認できた。1区の南端部も西へ折れる様子が見られる。長さ約11m、深さ約0.1mで、建物SB650を囲む雨落溝と考えられる。

3 庁舎建替えに伴う発掘調査

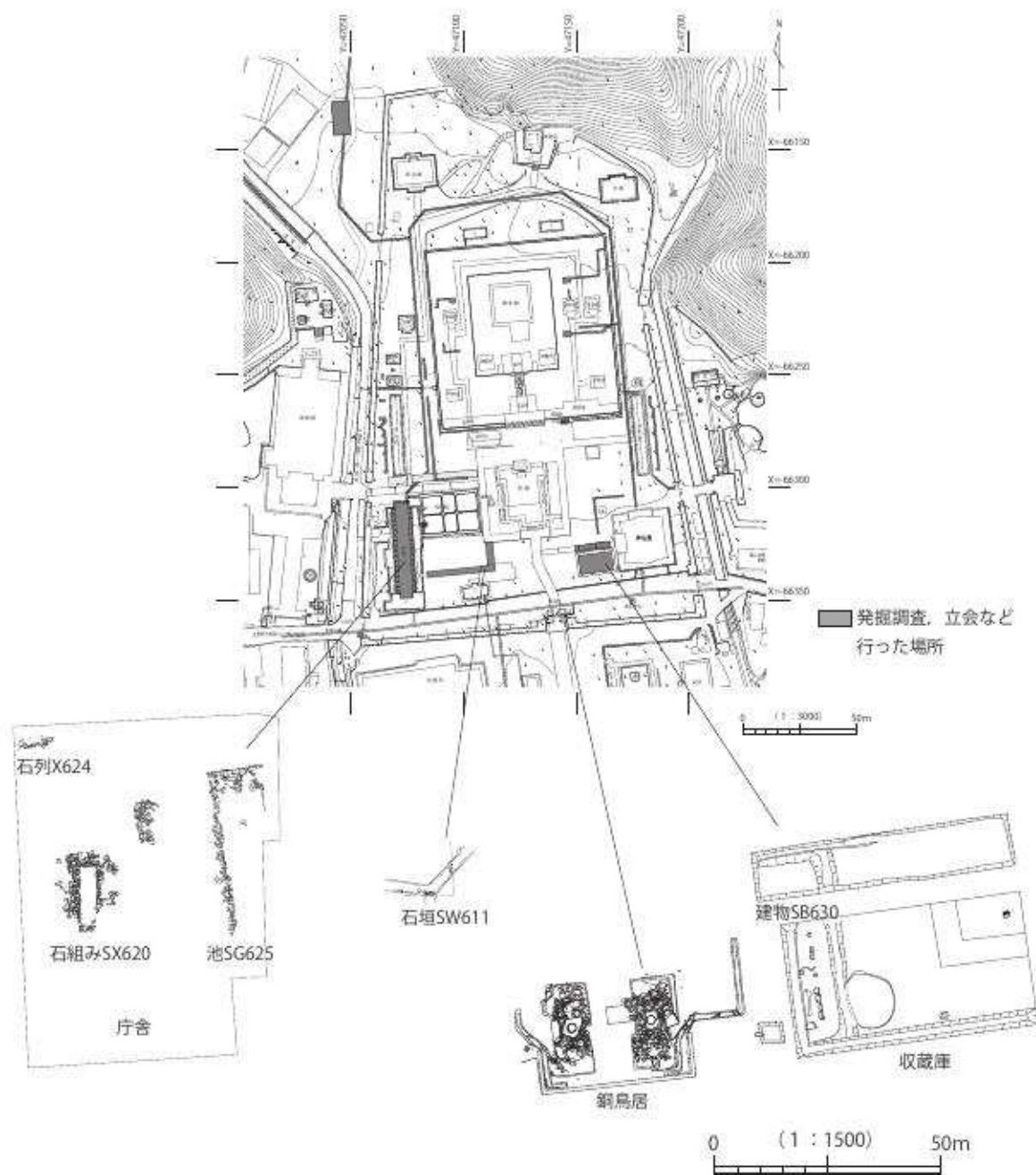
戦国時代から近世初頭の時期のうち、慶長期の洪水砂層以前の遺構として、石列SX624、中央調査区の石組み遺構SX620・柱穴SP626・石積み遺構SX621、東調査区の池SG625を確認した。

過去の調査(大社町教育委員会 2004、出雲市教育委員会 2017)では、当該時期の遺構は部分的に確認したが、今回まとまって確認できたことは、今後の当該時期の境内を検討するうえで貴重な資料を得ることとなった。

今回、特に注目されるのは、仏教色の強い遺構・遺物が確認できたことである。

池SG625は、少なくとも一辺14mの方形の池と推定できる。境内において池の存在が想定されるのは、仏教色が強まった時代に建てられていた弁財天の社殿を囲む池である。この社は、天文5(1536)年に建立され、寛文4年(1664)に撤去されたと記録に残る(佐草家文書『大社御造営日記』)。

今回確認した池は西側の一部であることから、より東側の池中心部において、中島が存在し、弁財



第21図 『平成の大遷宮』に関する調査で確認した遺構

天が祀られていたと推定することが可能である。

SX620 は、16世紀代に境内から排水した雨水をためる溜池と推定する。遺構の底には、松葉や松かさ（松ぼっくり）が大量に腐植土となり堆積していることから、周辺に松が生えており、遺構は地上に開口していたと推定する。このことは、花粉分析の結果からも推察される。また、「(県指定) 紙本着色杵築大社近郷絵図」（北島家蔵）に、境内の南から西南にかけて松が描かれていることも参考とすることができる。

腐植土は、AMS 年代測定によれば、16～17世紀前半の年代が得られているが、ここから出土する遺物は、12～14世紀と、16世紀以降の2時期に大きく分けられる。12世紀から14世紀の遺物は、いずれも完形品がなく小片であることから、16世紀代に、たとえば周辺で何かの工事があり、地面を掘削した際に出土した物を投棄したのではないかと想像する。一方、16世紀の遺物のうち、銭貨・経石などは、あえてここに投げ入れたのではないかと推定する。

第4節 遺物に関する成果

1 防災工事に伴う発掘調査

弥生時代から近世に至るまでの時期の遺物が出土したが、調査の深度が浅かったこともあり、近世の陶磁器が多く出土した。これまでの出雲大社境内遺跡の報告（大社町教育委員会 2004）にあるように、12～13世紀に見られる柱状高台付杯は、この調査でも多く出土した。

また、瑞垣内では、造成土の中から弥生土器・古墳時代前期の土師器・須恵器が出土した。客土としての供給元は、出雲大社からそれほど遠距離ではないと考えられ、周辺には古墳時代の生活域があったと考えられる。

鉄滓の出土は、境内近辺での小鍛冶の作業を示す資料で、昭和30年（1955）の調査でも確認されている。今回の工事立会では、時期については、他の遺物が出土しなかったことから不明であるが、簡易的な建築部品あるいは大工道具等の修理を、境内あるいは境内周辺で遷宮造営時に行っていたことを窺い知ることができる。

また、G区の一画では二次利用されたと思われる瓦敷き遺構が確認できた。室町時代の瓦であり、寛文度までは利用されていたと推定される。

神祐殿南では、鉄滓が出土した。工事中の立会であり、掘削幅が狭いことなどから広がり等の全容は分からなかったものの、遷宮造営時に小鍛冶作業が行われていたことを示す資料が得られた。

2 庁舎建替えに伴う発掘調査

中世後半の仏教色の強い遺物が出土している。それは、祈祷札と一字一石経である。祈祷札は、文字の残りが大変悪いため判読しにくく、紀年銘は確認出来なかった。文字は「[四方点] □奉勤修不動 [] 井般若經□□難 [] 品所」と判読している。脚注

不動明王や大般若經を思わせる文字が書かれていたことから、仏教色が強かった時代、大永4年

(1524)に建てられた大日堂との関連を想定させるものである。大日堂が機能していた時期（寛文4年（1664）に撤去）に関わる、何らかの儀式等に関係する遺物ではないかと考える。

SX 620では、丸い扁平な石が約130個出土した。このうち、85個に墨書が認められ、そのうち57個について文字が判読できた。墨書率は65%である。墨書率が高いことから、元々は全ての石に墨書されていたと考えられ、一字一石経と推定する。また、文字の書体の違いから、多数の人の手によるものと判断できる。墨書の文字については、『平成29年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡2』（出雲市教育委員会2018）を参照いただきたい。

祈祷札や一字一石経は、その内容からも仏教に関連する遺物であり、出雲大社境内で出土したこと、神仏習合の状況を具体的に示す遺物群として貴重である。

第5節 まとめ

10年にわたる発掘調査では、境内各所での発掘調査、工事立会などから多くの成果を得ることができた。

境内各地で確認できた近世初頭の大規模な造成（寛文の造成）など、時代によって大きく境内環境が変化していく様子を垣間見ることができた。

特に、庁舎建て替え工事に伴う発掘調査において、中世後半の仏教に関する文字資料の出土は、中世期における神仏習合の状況を具体的に示す資料となった。

古代については、遺物の出土はあったものの、具体的な境内の状況を確認する遺構は確認していない。

出雲大社「平成の大遷宮」によって、本殿ほか22棟の建造物が修造された。出雲大社に新たな歴史が刻まれるなか、その地下には古代から近世にかけて、幾重にもかさなる出雲大社の遺構、遺物を垣間見ることができた。扇状地という自然地形から水害など自然災害の被害に遭いつつも、造成を繰り返す境内地には、聖地を守ろうとした多くの人々の志が感じられ、畏敬の念を抱く。調査にご協力いただきました出雲大社に深謝いたします。

【参考文献】

出雲市教育委員会 2017 『平成28年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡』出雲市の文化財報告35

出雲市教育委員会 2018 『平成29年度出雲市文化財調査報告書 出雲大社境内遺跡2』出雲市の文化財報告37

公益財団法人文化財建造物保存協会 2013 『国宝出雲大社ほか22棟防災施設工事報告書』「第三部 発掘調査」

大社町教育委員会 2004 『出雲大社境内遺跡』

奈良文化財研究所 2003 『出雲大社社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会

写真図版



収蔵庫調査区（1区） 調査前状況（西から・奥の建物は神祐殿）



1区 建物跡 SB650 完掘状況（南西から）



1区 建物跡 SB0650 完掘状況（北から）



1区 溝跡 SD651 検出状況（北から）



1区 溝跡 SD651 完掘状況（南から）



1区 II層上面遺構完掘状況（西から）



1区 III層上面完掘状況（西から）



1区 III層上面 炭集中範囲（南西から）



1区 南西壁面（北東から）



1区 南壁の壁面（北西から）



1区 調査状況（東から）



渡り廊下調査区（2区・石畳の部分） 調査前状況（南東から・奥の建物は拝殿）



2区 1層上面検出状況（東から）



2区 溝跡 SD651 検出状況（北東から）



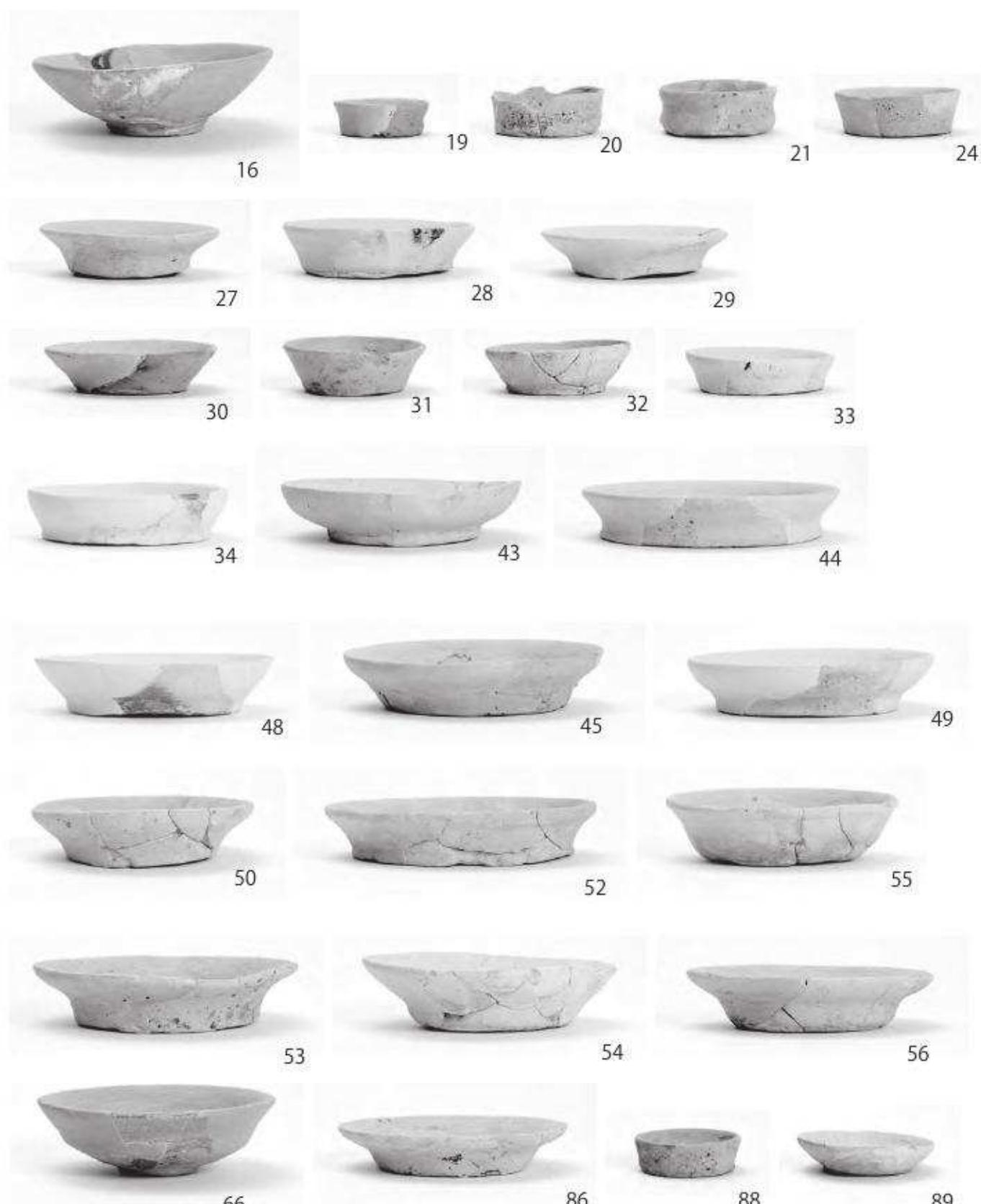
2区 溝跡 SD651 掘下げ状況（南西から）



2区 南側の壁面（北から）



収蔵庫・渡り廊下竣工状況（西から）



出土遺物（1）



95



98



101



110



111



113



114



115



116



132



139



140



141



118



120



142



144



126



129



122



125

報告書抄録

出雲市の文化財報告 41

平成 30 年度 出雲市文化財調査報告書

出雲大社境内遺跡 3

平成 31 年（2019）3月

編 集 出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
TEL (0853) 21 - 6618

発 行 出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
TEL (0853) 21 - 6874

印刷・製本 有限会社 西村印刷